

妓などの置かれたのを見ると、何だか腹立たしいやうな惜しいやうな心持がしなくてもなかつた。しかしそれもほんの纒の間で、やがて男の家は滅茶滅茶になつて、男は北海道の方へと行つて了つた。小照はその爲め、ピストルなどを向けられて、一時近所の噂の種になつて新聞にまで書かれた。『好い時、思ひ切つたわねえ、』など、歌子はその時言つてゐた。

土手の上で逢つてから、四五日歌子はその婆さんに逢はなかつた。處がある日のこと、ある處で逢つて、いろ／＼なお饒舌をしてゐると、婆さんは思出したやうに、

『此間、一緒にゐた方は、お客様？』

『え。』

『いつから？ 長いお馴染？』

『もう、かなり前よ。』

『あの人一度見たことがあるから……』

『さう？ 何處で？』

『何アに、ちよつとした處だがね。』

『この土地で？』

『え……』と婆さんは點頭いて見せて、『この奥にゐる、うちの人といひ此頃懇意になつた、同じ工場に

出てるる上さんの許で。』

『へえ。』

と歌子は不思議さうな顔をして、『そんな處にあの人行つてゐたの？』考へるやうにして、『親類か何かしら？』

『私も詳しいことは知らないけどもね。それに、その上さんともついで此頃懇意になつたばかりなんだから。』

『それで、何んなにしてゐて？』

『私が少し用があつて入つて行くと、あの人長火鉢の處に坐つてゐたつけが、いろ／＼なことを言ふよ。この土地の藝者のことなどよく知つてゐる人ね。』

『誰か伴れ込んで來てるんぢやないかしら。』また考へて、『其の時は一人？』

『一人きりだつたよ。でも、親類ツて言ふ風な話し振でもなかつたよ。』

『上さんは何んな人？』

『上さんはもう四十先きだよ。亭主は五十位の人で、それは内にも一二度來たことがあるよ。』

『二階があるの？』

『あるよ。』



『二階でも貸しさうな人ぢやない?』

『それがさ……上さんが何うもさういふ風な人だから、私もちよつと胸に浮んだのさ。あゝいふ人があんな家に行つてゐるのがをかしいからね。』

『さうね……少し間を置いて、『そしてお上さんちき歸つて來たの?』

『でも、三十分位ゐたよ。お前さんの話なんかしてゐたよ。』

『何だツて?』

『かういふ人がゐるだらうなんて言つてゐたよ。それから、小照さんや春子さんの話なんかもしてたよ。かなり土地のことをよく知つてゐる人ね。』

『へえ?』かう言つた歌子は持つてゐた不思議の中に明るい光線のさして來るやうな氣がした。歌子は暫し考へ込んでゐたが、

『他にはどんなことを言つて?』

『私は、それからすぐ歸つて來ちやつたから、あとは知らないけれど、此間、お前さんと歩いてゐる人がその人だから、へい!』と思つたよ。』

『お上さん時々行くの、其處へ?』

『別に行きもしないけれども……』

『ちや、今度行つたら、それとなく訊いて頂戴よ。少し譯があるんだから……』

『いゝともね。』

『その代りお禮はするわ。』

『兎に角、あんな人があんな家に入入りするのがちつと變だね……。いゝともね、聞いておくともね。すぐわかるよ。』

『へえ? さうですかね。そんな處に入入りするんですかね。』歌子はかう繰返して言つて、その不思議の中から思ひ當る節々を捜すやうな顔色をした。

二十六

その次ぎの次ぎに逢つた時に、歌子はだしぬけに富田に言つた。

『貴方、好い穴が出來てね。』

『何故?』

『何故もないわ。變だ、變だと此間から思つてゐたら、思つてゐた通りね。』

『何が——』

『何がもないわ。此間——さう昨日、一昨日の午後にこの裏の通りをこつそり通つて行つたでせう。』



あそここの角から曲つて行つたでせう。あそこに行つたでせう。』

『あそこツて何處？』

『まだあんなことを言つてゐる。すつかり種は上つたのよ。いくら隠したツて駄目よ。私が見てたんだもの……』

『だつて、知らない。』

かうは言つたが、富田の顔はいくらか赤くなつてゐた。

『知らないことがあるもんですか。その二階屋の上さんが店頭に出てゐて、貴方が何か言ひながら上つて行つたぢやありませんか。私、實は呆れて了つた。そんな貴方ぢやないと思つてゐた。男ツてそんなもんですかね。』

軽く笑つたやうな調子で歌子は言つた。

『そんなことを言つたツて、僕はちつとも知らないよ。僕はそんな處に行きやしないよ。何故、そんなことを言ふんだい？ 誰か人違ひぢやないかえ？』

『人違ひ？ さうかも知れないわ。』

かう言つて、『まア、人違なら人違ひで好いわよ。何も私がそんなお世話なんかやかないツたツて好いんだものねえ。だけど、呆れましたよ、本當に……。』

『何だかちつともわからない。』

『まア、貴方も貴方だが、あの女も女ね。随分度胸が好いのね。私、そんなことは夢にも知らなかつたから平氣で甘いことを言つてゐたのね。随分、私、甘かつたわねえ。中でもこの間モーターに行つた時なんか甘かつたわねえ。』

こんなことを言つて歌子はまた笑つて見せた。富田はまご／＼したやうにしてゐた。富田はお衆のことを考へてゐた。『それにしても、何うして知れたらう、本當に見られたのかしら。』こんなことを思つてゐたが、すぐそのあとから、お衆の身の上のことが逸早く胸に上つて來た。お秀のことなども思ひ廻された。しかし、二人の間の空氣はさう突詰めてはゐなかつた。

富田はわざと笑ひながら、

『えらい想像をしたもんだな。』

『もう、白狀した方が好いわよ。』歌子はをかしくなつたといふ風で、『私も甘いけど、貴方も随分甘いわねえ。何うしたの？ 一體？ 何處で出來たのよ。此處で？ ぢやない？ すつかり白狀おしなさいよ。堪忍して上げるから。』

『だつてそんなことちつとも知らないもの……。知らないものを何うしやうもないぢやないか。』

『變だ、變だとは私も思つてゐたのよ。』歌子はかう繰返して言つて、笑ひながら富田の顔を見た。



富田は自分の口からはつひにお衆との關係を言はなかつたけれど、何の位の程度まで歌子がそれを知つてゐるかといふことに就いては、苦心して探つた。歌子は『一體何うして出来たんです?』など言つて迫つて行つた。富田は辯解した。

『ちや、何うして、貴方、あんな處に出入するの?』

『昔から知つてるんだよ。』

『その上さんを? そんな嘘を言つたつて駄目よ……』

『でも、僕が行つてゐる家に、お衆さんが行つてゐたつて不思議はないぢやないか。わるく疑ふからさう見えるんだよ。』

『そんなことはない……』

『つまらんことを女將に言つたり何かしてはいけないよ。そんなことはないよ、さういふ風に思はれちや、お衆さんに氣の毒だからね。』

『それ、御覽なさい。本當ぢやありませんか。』

『何故?』

『さうでなくつて、今、言つた口が出ますかよ。矢張心配になるんだよ。』

『駄目だな、すぐあゝ取るから。唯、さう思はれちや氣の毒だと思つたから言つたんだよ。』

『さうですかよ。貴方も随分此頃はたちがわるくなつたわねえ。お茶屋の女中なんかと出来たり何かして、見つともないぢやありませんか。人に知れて、きまりがわるくないの? 貴方?』

『まア、好いよ、何うでも……』

『本當に、私だつてきまりがわるいわ。此處にゐる大勢の姐さん達に知れたつて物笑ひだわ。イヤだえ、本當に、貴方は?』

『まア、よせ、面倒臭い。』

『私、言つてやるから構はない。だつて、お茶屋の姐さんが藝者の内情をすつばぬくつていふ法はないんだよ。それぢや稼業は出来やしなもの。』

『まあ、好いつて言ふのに……』かう言つた富田はいくらか眞面目になつて、『俺だつて言ふことは澤山あるよ。随分俺だつて、お前の世話をしやつた。お前はそんなことを言はれた義理ぢやないぢやないか。』

『何うして?』

『ひどい目に遭はせてゐるぢやないか』

『何う、ひどい目に?』

『わかつてゐるぢやないか。もう言ふのは面倒臭い。』



富田はかう言つて、両手を後頭部に組んだまゝ後にごろりと倒れて了つた。其處に番のお仙がやつて来て、例のお世辭を振り蒔いたが、いつもとは座敷の様子が違つてゐるので、ちよつとあたりを見廻して、『何うかなすつたの？』かう歌子に訊いた。

『何でもないのよ。』歌子は笑つて打消した。其處にお糸が莞爾しながらやつて来た。

其處に来て挨拶したお糸の顔を歌子は凝と見た。『今日は随分暑いねえ。』かう言つてお糸は縁側に腰をかけてゐるが、寢ころんだまゝで容易に起きない富田の方を見て、

『何うかなすつたの？』

『いゝえ。』

歌子がかう言つたと同時に、富田は急に起きかへつた。ちよつと掠めるやうに、お糸の顔を見た富田は、すぐお仙の方を向いて、『水を一杯呉れ給へな。』

『何うかなすつたの？』

『何アに、何でもないよ。』

お仙はやがて立つて行つた。富田は餉臺の上についてあつた盃をぐつと呷つたが、狭い庭に咲いてゐる草花を見て、『もう秋草もちきだね。萩がもうあんなに咲いた。』

『本當ね。』

歌子は靜かに落附いた調子で言つた。しかし庭の方を見た眼をすぐお糸の方へ移して行くのを富田は見た。歌子はまた歌子で、見ないやうにして絶えず富田の眼の行方を見てゐた。

『早く涼しくなれば好いのねえ。』

お糸はこんなことを言つてゐた。お糸は何となく壓されるやうな氣分を感じた。いつもとは著しく違つてゐた。富田と歌子との間も變であつた。富田が手酌で酒を注いだりするのを歌子は黙つて見てゐた。お糸は富田の顔を見た。そのあとを歌子の眼は追ひかけて行つた。

女將が昨日から病氣で寢てゐる話などをお糸のするのを、歌子は平生と少しも變らない調子で聞いてゐるが、それでも時々變な鋭い眼色をしてお糸の體を捜すやうにして見るのを富田は見た。其處へお仙は水を持つて来て富田に渡した。

やがてお仙を捉へて、軽い戯談を言ひ始めた富田の態度には、何處かわざとらしい調子があつた。お仙は唯キヤツ／＼と言つて笑つた。歌子が、『でもお仙姐さんなんか大丈夫ね。』と言ふと、『えゝ、えゝ、私なんか男にはもう懲々……それはねえ、歌ちゃん、亭主にはもう愛想をつかしたんだもの。』こんなことを言つてお仙はめづらしくその亭主の話を持出した。傍からお糸はちよいちよい口を挟んで見たが、富田も歌子もいつものやうに調子好く相手になつて呉れないので、お糸は少しゐてから、つまらなさうにして挨拶して向うへ行つた。



二人きりになつた時、歌子は、言つた。『矢張、さうね。わかるわねえ。』

『い、ちやないか、そんなことはもう……。』

『好う御座んすとも……。わるいつて言ひはしないわ。』

『まア、酒でも注いで呉れたまへ。』

『女は随分度胸が好いわねえ。……私を笑ひ草の種か何かにする積りであるのね。でも、さうはいかないわ。』

『まア好いつて言ふのに……。』男は機嫌を取るやうに笑ひかけて體を女の方へ寄せて行つた。

その次ぎにお仙が入つて來た時には、以前に引きかへて、二人は唯面白さうに笑ひ戯れてゐた。

## 二十七

その夜はお糸は富田の傍に寄りつけなかつた。隙を窺つて何遍となくその室の方へ行つて見たけれど、歌子はいつも富田の傍を離れずについてゐた。さつき歌子の自分を見た眼も氣にかゝつた。

そればかりではなかつた。そこから一間置いた室の番に當つてゐたお糸は、廊下の處で一度ならず二度までも歌子とすれちがつた。いつもならば莞爾した顔を見せて、如才のない世辭を言ふのが常であるのに、今日は不思議にも、すつとすまして、見ないやうな風をして、わざと別の女中に聲をかけたたりした。

二度目に此方から話しかけた時には、『さうね、』と冷かに挨拶したゞけて、そのまま富田の室の方へ急いで入つて行つた。

兎に角今日は不思議だ。喧嘩でもしたのかも知れない。こんなことをお糸は思つてゐたが、持つた番の忙しいのについ追はれて、別にさう深く考へる暇もなかつた。十時過にそつと行つて見た時には、二人はもう其室にはゐなかつた。

『歌ちゃん、萩？』

など、お糸は番のお仙に訊いた。

それから一時間ほど経つた。大勢の客の跡片附をしてすつて、そこから此方へ出て來ると、夜具蒲團などを入れて置く傍の暗い押入の處に、黒い一つの影があつて、頻りに此方を手招きしてゐた。

お糸は寄つて行つた。

それは富田であつた。やがて二つの影は傍の明いた暗い一間の中に入つて行つた。富田は顔を寄せて、小聲で二言三言お糸に言つた。

『さうなの？』

『だから、さう思つてゐなくつちやいけないよ。』

『困つたわねえ。何うして知れたんでせう。』



『何うしてだか、よくわからないがね。』

『それで、あんな風だったのね。私も變だとは思つた。』

『しかし、大丈夫だよ。』

『でも……知れちゃ大變ね。』

『まア、心配しないでお出でよ、その中行くから。』

『明日来て下さいな。』

『成たけ行く——』富田はかう言つたが、『ちや、その時緩くり話をするから……。さつきからそれを言はうと思つてゐただけども、中々駄目なんだよ。ちや、その時……』

『明日、いつもの頃にね。』

『あゝ。』

かう言つたが、その時長い敷石を此方に傳つて來る女中の足音が聞えたので、二人は慌て、別れた。二人手を握る間さへなかつた。やがて女中をやりすごして其處から出て行つたお糸は、俄かに胸の鼓動の高くなるのを覺えた。さつきの歌子の態度や言葉などが繰返されて來た。お糸は明るい電燈の下で思はず溜息をついた。

## 二十八

お糸は種々のことが氣に懸つた。歌子に知れたといふことは、女中達や女將に知れたといふこと、同じであつた。いつお糸は女將から呼びつけられて、お秀と同じやうな運命に遇ふか知れなかつた。お糸はかうして落附いて居られないやうな心持になつてゐた。番に當つたのがお仙であつたのも運がわるいと思つた。お糸はもう少しさつき車を呼んで急いで歸つて行つた富田のことを考へて、床に入つてからまでもひとりそのことを繰返してゐた。

『何うしてお歸んなさるの？ もう遅いぢやありませんか。』

など、その時女將は寢ようとしたのを二階から下りて來て富田に言つてゐた。其處に立つて見送つてゐた歌子は、富田の車の出て行つたあとで、帳場で何か二た言三言女將に話してゐた。女將は笑つてゐた。

闇の中に没して行つた富田のパナマ帽の白いのが疲れたお糸の夢現の中に往つたり來たりした。なアに……構ひやしない。こんな家になんか置いて貰はなくつても好い。明日は早速相談して、一刻も早く此處から出ることにしやう。こんなことを考へるかと思ふと、あとからあとへと男に對する不安やら疑惑やらが續いて出て來た。『そんな富田さんぢやない。』お糸はかう強ひて獨言して、渦のやうに亂れて來る



心を何遍となく押静めて見たが、矢張駄目だった。……歌子……富田……自分が怒つたり泣いたりしてゐるのを、歌子と富田とが平氣で笑つて口でゐる夢から覺めた時には、お糸の枕は涙に濡れてゐた。夜はいつか明方近くなつてゐた。

朝起きて一緒に掃除をしながらも、お糸は何となくお仙の眼に逢ふのを恐れた。その眼は凝と自分の方を見てゐるやうに思はれた。それにお妻もお定も其他の女中も皆なもうその事を知つてゐて、笑つて自分に對してゐるやうにすら思はれた。やがて起きて来て、姪のお貞を指圖して朝の座敷の花を生けかへてゐる女將の傍を通るのも何となく後めたいやうな氣がした。『お糸さんお早う。』『こんなことを男衆から言はれたのも氣にかゝつた。』

昨夜遅くお糸の番に當つた泊込みのお客は、奥の桔梗の間に寝てゐた。お糸はその前の座敷を掃除して、廊下に雑巾をかけてゐるが、ふと其處のベルが靜かに鳴つた。『姐さん？ お風呂は？』かういふ艶かしい聲がつゞいてその中から聞えて、やがて長襦袢のまゝの女は、其處から出て厠に入つて行つた。目の覺めるやうな綺麗な女であつた。つゞいて出て来た男は、風呂の加減をお糸が見に行つてゐる間、座敷の縁側のところに躡踞つて、庭に咲いた草花などを見てゐた。

『何うぞお召し下さいまし。』かう言つて置いて、お糸は桔梗の間に入つて行つて、蚊帳を外したり蒲團を疊んだりした。散らばつてゐる櫛だのマツチだの煙草だのを小さいみだれ箱の中に入れて其處から出

て来た。溜息がひとり手に出た。

## 二十九

その日は朝の内は女將の機嫌が好かつたが、午後貰ひに行つた勘定が取れなかつたので、急に機嫌がわるくなつて、散々女中達に當り散らした。『お上さんだつて、あれで心配があるんだから、無理はないけれど、何もそんなに私達に當らなくつたツて好きさうなものだ、』など、お定は言つてゐた。女將は到るところで癩癩の聲を立てた。後には、庭の掃除の仕方がわるいと言つて男衆にまで嘸鳴り附けた。姪のお貞などは隅の方に小さくなつてゐた。

そこに運わるくお貞の母親がやつて来た。それは女將の妹で、來ると常に無心を言つて行つた。これに限らず女將の同胞には運のわるいものが多かつた。弟に當る男は、女將の留守によく麥酒の罎を内所で持つて行つたりした。兄は種々なことを計畫して、失敗する度に、いつも此處に來て女將を苦めた。『それはねえ、貴方、同胞だから、出來ることはしてやりたいんですけど、さうく私だつて續きませんからね。』女將はこんなことを常に自慢さうに懇意な客に話して聞かせた。

お貞のことを心配してやつて來た母親は、一も二もなく癩癩の餘波を受けた。帳場の傍で話してゐた女將の聲は次第に高くなつて行つてゐた。『お前、そんなことを言つたつて駄目だよ。』かう言つた女將の



顔には、神経性の激した色が上つてゐた。

お糸は氣の毒でならなかつた。もう時計は三時を過ぎてゐた。言ひ出せば屹度何か言はれるに相違ない。烈しい小言を打突けられるに相違ない。いつそお定に頼んで黙つて行かうとも思つて見た。しかし後護たい心が底にあるので、それも出来なかつた。お糸は立つたり居たりしてゐた。その間にも段々時は経つて行つた。お客でもあれば猶ほ出られなくなる……。かう思つたお糸は、思ひ切つて、女將とお貞の母親との話の隙を見て、『ちよつと、一時間ほど醫者に行つて來たう御座いますが、』と言ひ出した。

『何處がわるいのだい？ また齒かえ？』女將の聲は鋭かつた。

『いゝえ、熱が少しあるやうで、頭が痛くつて仕方がありませんから。』

『とんだ頭だねえ……。一階で、誰か待つてゐたらう。馬鹿におしてないよ。』

お糸はギョツとした。顔がサツと赧くなつた。

『お前にも言ふことがあるんだよ。本當に碌でもないものばかり揃つてゐる。そんなに男が戀しいのかねえ。そんなに戀しけれや、男の傍に行つてかちりついてお出でよ。』かう言つたが、好いともわるいとも言はずに、もつと肝心なことがあるといふやうに、お貞の母親の方に話を向けて了つた。お糸はすぐすこ此方へとやつて來たが、此まゝ行かずにゐる譯にも行かなかつた。お糸の内心の要求は愈々熾になつて來てゐた。お糸はお定に頼んで、こつそり裏門の方から出て行つた。通りに出ると、お糸は急いで歩いた。

お糸が行つて一時間ほどしてから富田はやつて來た。お糸は何うにか話をきめて、急いで歸らうと思つたけれど、さて逢つて見ると、さうも行かなかつた。お糸は二人の間はかなり深く突詰めてゐるのを感じた。お糸は話しかけて男の心を讀まうとするやうに、ちつと顔を見たりした。考へ込むやうにしてゐる富田の態度はお糸には物足らなかつた。

『兎に角、私はもうあそこを出なければやならないんですから。』

お糸は決心を示したやうな口の利き方をした。

『それにしても本當に、お上は知つてゐたらうか。』

『知つてゐるんですとも……。確に知つてゐるんです。でなくつちや、あんなことを言ふわけはありませんもの。』

『何うして知れたんだらう？』

『何處かで見られたんぢやなくつて？……。そしてかまかなんかかけられたんぢやなくつて？ あの人、中々さういふことは巧いんですから。』

『いや、さうぢやない。誰か知つて話した奴があるんだよ。』

こんなことを言つて見たところで仕方がなかつた。何とか富田が言つて呉れるのをお糸は望んだ。お



衆は一步突込んで言はうとしては幾度か躊躇した。段々お衆の心は焦立つて行つた。

『それにしても、一體、貴方何うするつもりなの？』

『世話はしてやるよ。僕だつて、そんなに無責任ぢやないから。』

『だつて、世話をするだけではわからないわ。何う世話をして下さるの？』

『それは僕の出来ることなら、何うにでもしてやるよ。何處かの二階でも何でも借りるさ。』考へて、  
『しかし、まだ、お上に言はれた譯ぢやないんだから、もう少しぢつとしてゐたら何うだえ。』

『だつて恥をかゝせられるのは厭だわ。』

『好いよ、好いよ、そんなに心配しないたつて好いよ。イザとなれば、何うにでもしてやるよ。』

『私はかうなつては、明日にも暇を取らうと思つてゐるのよ。』かう言つたお衆はふと頼りないやうな心になつて、『貴方、本當は、私のことなんか考へてゐるやしないでせう？』

『何故？』

『だつて……さうなら、もつと心配して呉なければならぬ譯だもの。ボートに行つた時だつて私はさう思つた。貴方はあの人に惚れてゐるんだから駄目よ。』

『そんなことはないよ。』富田は笑つて、『ちや、前に言つたやうに、田舎に行くかえ？』

『田舎は厭……』

『何うして？』

『何うしても厭……。苦勞しても此方にゐるわ、私。貴方が世話が出來ないと言へば、他に行くところはいくらもあるんだから……。私、いつそ丸つきり知つてゐる人のゐないところに行かうかしら？』

『何故だえ？』

『何故でも……詰らないんだもの。私なんか、貴方などのお世話にならうと言ふのが間違つてゐるんだもの。』

『そんなことはないよ。世話はしてやるよ。』

見ると、お衆はいつか涙を惨ませてゐるので、富田は可哀相になつて、なだめるやうに體を寄せてギウと手を握つた。さういふ處につとめてゐる女中に似合はずしほらしい素直なところのあるのが、富田に離れ難い情を起させた。『大丈夫だよ、本當に大丈夫だよ、そんなに心配しないで……』

一時間ほどした後には、お衆は男に縋るやうにすつかり心を開いてゐた。二人は其間に種々なことを語つた。『あんな奴』といふ言葉が久し振て富田の口から出た。『ちや、さうして下さるわねえ、本當に……』  
『こんなことを言ひながら、お衆は階下を歩く人の足音に氣を兼ねて、話をやめて耳を敬てたりなどした。滅多に口にしたことのない富田の細君の話なども出た。『奥さんのことなんか私は何とも思つてやしない。奥さんの爲めなら、一と月貴方が來ないたつて好いけれど……、あの人の爲めに來ないやうなこ



とがあつたらきかないから……。その時は私はどんな真似でもするから。』かう言つたお糸の頬には、後毛が二三本かゝつて、壊れかけた髪からは櫛が落ちてゐた。隣の銚屋からは、絶えず鏈の音が聞えて來てゐた。

『何處かへ行つて見たいな。』

突然富田はこんなことを言出した。

『行つて見ませうか。』

眞面目な調子でお糸は合はせた。

『歸らないでも好いかえ？』

『いゝわ、何うせ叱られるんだもの……。今度叱られたら、此方から出て來るんだもの。さうきめて了へば、何でもないわ。行つて見ませうか？』

『よければ行つても好い。』

『行きませう。』

お糸は嬉々して立上つた。

『何處へ行く？』

『何處か涼しいところが好いけれど……』

『この近所では駄目だね？』

『さうね、近所でない方が好いわ。』

女將のことも氣にかゝるにはかゝつたけれど、さうした歡樂の方がより多く力強くお糸の心を引いてゐた。初めて逢つた時きり、お糸は思ふまゝ體を男に任せる機會がなかつた。今日こそ心も體もすつかり男に任せて了ひたいとお糸は思つた。ふとお糸は言つた。

『でも、髪が壊れてゐるわねえ。』

『何アに、それで好いよ。』

『ちよつと待つて頂戴。』かう言つて髪結さんが來て呉れるか來ないかを相談しに階下に下りて行つたが、すぐ上つて來て、『構はない、これで行くわ。』かう言つて鏡臺を出して髪を撫でつけ始めた。

富田が財布を出して中を改めてゐるのを見て、お糸は髪を梳きながら言つた。『私、少しなら、お金、持つてますよ。』

『僕もある。』

『餘りお金のかゝらない處が好いわねえ。待合なんか駄目ですよ。』

『でも、他に好い處があるかえ？』

『何處だつて好いちやない？ 旅籠屋だつて何だつて？』



『でも、東京の旅籠屋は險呑だ。』

『大丈夫よ。』お糸はかう言つたが、『もうかうなつて了へば、何でもないわ。何うなつたつて構はないわ。仲店だの、彼方此方歩いて見ませうね。誰に見られたつて逢つたつて構ひやしない。』

瀟洒した意氣な扮装をして富田と一緒にお糸が其處を出たのは、日が暮れてから少し経つた後であつた。出かけたのをちよつと戻つて、『何とか言つて來たら、體の具合がわるいつてさつき出て行つたきりまだ歸らないつて言つて頂戴な。』かう上さんに頼んで置いて、五六間先に行つて待つてゐる富田に追ひ附いた。

それでも流石に二人は土手の方へは行かなかつた。二人は裏道を選んで歩いて行つた。二人は戀人のやうにして歩いた。『何うなつたつてもう構はない。』お糸はかう繰返して男の手を闇に握つた。

賑やかな明るい灯は、やがて二人の前に開けた。此頃は夜は餘程涼しくはなつたが、それでも人はまだ陸續と涼みに出てゐた。電車の中の人影が明るく透いて見えたり、廣告燈が赤く青くぐる／＼と廻轉してゐたりした。仲見世の入口の柳の葉は灯の影を微かに帯びて、その下では男が頻りに夕刊を賣つてゐた。仲見世は美しく灯にかゝやいてゐた。

觀音堂の大きな門の傍の暗い處では、お糸は富田を待たせて酸漿を買つたりした。それほどお糸の心は晴々してゐた。二人は池の傍を廻つたり活動寫眞前の雜沓の中を押すやうにして通つたりしたが、細

い通りを大通りの方へ出ようとするとところで、向うからやつて來たお秀にばつたり顔を合せた。

『おや、まア、富田さん。』

かう言つたお秀は、お糸を捉へたまゝ容易に放さうとはしなかつた。二人は立つて話した。富田はぶらぶらと二足三足先に歩いて行つたが、振返つて見たときには、二人は顔を合せて何か熱心に話してゐた。お糸の顔は人の往つたり來つたりする中に白く浮出すやうに見えてゐた。富田は五六間先の電信柱の處に立つて待つてゐた。

やがて別れて急いで此方に來たお糸は、

『放さなくつて困つたわ。』

『何うしてゐんだえ、此頃？』

『清どんにすつかり入揚げて了つたんですとさ。今ちや、この土地の濱の家ツて言ふ家にゐるんだつて滴してゐてよ。』

『僕のことを何ツて言つてゐたえ？』

『吃驚してたわ。』

『何う言つて吃驚してたえ？』

『まアさう？ なんて言つてたわ。歌ちゃんのこととも言つてゐたわ。……でも、私、可哀相になつち



やつた。清どん、ひどいんだって。あんなやさしい蟲も殺さないやうな顔をしてるて、あそこを出ると間もなく巻き上げて突放さうとしたんですって、私、あの人とはそんなに懇意にしてるなかつたけれど、話を聞いて可哀相になつちやつた。あそこで拵へた着物なんかすつかりなくしてすつたんですって！随分ひどいのねえ。』

『それでも今でも矢張離れずにゐるのかえ？』

『矢張離れられないやうな様子ね。……あその女中達のごたくも知つてたわ。お梅さんの話もしてたわ。私も出るかもしれないって言つたら、ちやもう皆なるなくなつて了ふのね。本當にあゝ喧ましくつちや、いくらお金になつたつてゐられやしないなんて言つてたわ。』かう言つたが、小聲で、『私も捨てられたら、仕方がないから、またさういふ處に行くのね。』

お衆はこんなことを言つて笑つた。人は織るやうに通つてゐた、誰も二人の方を見るものもなかつた。人道の片側には、夜店がずらりと並んで、古道具屋の爺の顔は灯の中に明るく浮出すやうに見えてゐた。片側の氷店には、電燈が青く赤く輝いて、夜涼を趁つた客が一杯に詰つて入つてゐた。二人はある小さい西洋料理店に入つて、手輕な二三品を命じて麥酒などを飲んだ。二人の向ひ合つて腰をかけた卓の上には、小さな柘榴の盆栽などが置いてあつた。白いエプロンをした女給仕はじろくくと二人の方を見た。其處を出て電車に乗つた二人は、何處に行くといふ當てもなかつた。二人はやがて大きな停車場の前で

下りて、灯の明るい町の中を歩いた。活動寫眞の大きな看板に誘はれて、ちよつと入つては見たが、面白くないので、一時間も経たない中に其處から出て來た。二人は流石に旅籠屋にも入る氣になれなかつた。

ふと氣が附くと、小さな停車場が二人の前にあつて、明るいガランとした中に乗客が二三人待つてゐた。奥には電車が一臺來てゐた。

『あそこが好いちやないか。』

『さうね、好いかもしれない。私、よく知らないけど……。』

『あそこにしよう。』

富田が切符を買つてゐる間、お衆は待合室の隅の方に行つて腰をかけてゐた。やがて時間は來た。

二人を乗せた電車は山の裾のやうなところを廻るやうにして早く／＼通つて行つた。空いた車室の中には五六人しか客は乗つてゐなかつた。やがて下りた小さな停車場、その停車場から廣告燈をたよりに暗いところを登つて行くやうな路、繁つた木立の中にあるさびしい一軒の旅館、その入口からすぐに傳つて行くやうな長い廊下、歩く度にぎし／＼きしむやうな粗雑な普請、その奥のところに二人は落附く六疊の一と間を發見した。



女將は別に小言を言はなかつたけれど、お衆はもう其處に勤めてはゐられない身になつてゐた。お衆の秘密はもうすつかり女將や女中達に知れてゐた。さういふ二階がお衆にあつて、今度の事件の前にも男が来て泊つて行つたといふことまでも、何處からともなく知れて來てゐた。『私も變だ、變だと思つてゐたんですよ。』かう歌子が女將に詳しい話をした時には、女將は深く考へるやうな顔色をして點頭いて聞いているた。『生若い女中は何うしても駄目だね。』など、言つてゐた。

兎に角相手が長い間最眞にして呉れた客だといふことも女將の腹にあつた。お衆がきまりわるさうに入つて行つて二日黙つて留守にした詫を言ふと、『解つてゐるよ、もう解つてゐるよ。』かう女將は手で制して、眞面目な顔をして、スツと向うへ行つて了つた。其處にゐた姪のお貞は凝とお衆の顔を見た。

お仙もお妻もわざと知らん顔をしてはゐるたが、眼から來る冷笑は絶えず鋭くお衆の體に浴せかけられてゐた。誰も彼れも皆な腹の中で指して笑つてゐるやうにお衆には見えた。

ふとお定が手招きをするので、其方に行くと、

『私も急に出ることになつたよ。』

『何うして?』

お衆は驚いて訊いた。

『少し譯があるんだよ。あれから、お前さんが出て行つてから、大騒ぎだつたよ。女將さんが怒つてね。』

『私のこと?』

『いゝえ、さうぢやないんだよ。種々なことが溜つてゐたんだよ。私も散々毒づかれたよ。お前のやうなぐづは何年使つたつて役に立たないから、他所に行つて、もう少し世間を見て來いつて言はれたのよ。私だつて、お袋つていふものがあるから、扶持を離れちやちよつと困るけれど、さう言はれて見れやねえ、お前さん、仕方がないから、下谷に行くつもりなんだよ。』

『さう?』

かう言つて顔を曇らせて、『ぢや、皆なるなくなつて了ふのね?』

『お仙さんも出るらしいよ。』

『お仙さん? 本當? それはうそぢやない?』

『本當だよ。』

『さうかしら?』容易に信じられないといふ風でお衆は言つたが、『そして下谷は何處?』

『あそこにちよつと知つてゐる家があるんだよ。眞砂家つていふ。お前さん、また、彼方に來たらお出



てよ……。それにしても、お前さんは何うするの？』かう言ひかけたが、ちよつと笑つて見せて、『歌ちゃんが昨日来て、長いこと何か話してたよ、お上さんと。』

『どう？』

女將の後姿が見えたので、話を半に、お糸は別れて此方に來たが、種々なことが胸に迫つて來て、急に涙が出さうになつた。兎に角一年近くもゐた家をかうして離れて行くのが辛かつた。自分と同じやうに忙しい中を勤めて來た女中達がさうして皆な出て行つて了ふのも悲しかつた。

一年間のことが取集めてお糸の頭に簇つて來た。中でも、田舎の停車場で富田に逢つたことがはつきりと考へられた。あの時富田にも逢はず、逢つても一緒に川の縁の旅館に行かなかつたならば、かういふことは初めから出來て來なかつたのである。お糸はその時の自分の心持を振返つて繰返して見た。

女將は『お前、また取りに來るのは大變だから、荷物をすつかりまとめ持つてお出でよ。』などと言つた。お糸は今更に人の心の冷めたいのを思ひながら、二階に行つて、押入の中から自分の行李を取り出して、種々なものをそれに入れた。お糸は其處に躊躇つて一時間ほど何か頻りに整理してゐた。

お糸は新しい生活を思つてゐた。別れて行くのも辛いやうな氣がするけれど、かういふ忙しい束縛から脱れて、自由に暮して行かれるやうになるのは嬉しかつた。お糸は新しい住心地の好い一階などを想像した。

お糸は皆なに暇乞をして、やがて其處から出て來た。門には丁度自動車が一臺來てゐて、若い藝者が二人客と纏れながら此方へ入つて來ようとしてゐた。

『何うしたの？ お前さん。』

家では、車につけて行つた荷物を見て、上さんが吃驚したやうな顔をして訊いた。お糸は碌々その返事もせず、二階に上つて、其處にある硯箱の蓋を取つて、長い間かゝつて、金釘のやうな拙い字で、富田に宛てた手紙を書いた。——何うか一刻も早く來て下さいまし、何うして好いかわからないで困つてをりますから——かういふ言葉の次に、——うれしく、此間のことは忘れられません——など、つづけた。

宛名を旦那さまと書いた。

下に降りて、自分でそれを出して來てから、お糸は初めて詳しい話を上さんにした。上さんは同情したやうな顔をして點頭いて聞いた。あの方が世話して下さるなら、その方が合せだとも、お前さん。女中なんかしてゐるより何んなに好いか知れやしないよ。』

『何處か好い處はないだらうかね？ お上さん。』

『矢張、此の近所でかえ？』

『この近所の方が好いつて言ふのよ。』



『いくらもあるだらうよ。』

『心がけて置いておくんさいな。』

かう頼んで置いてからお衆は女將のことや女中達のことなどを話した。歌子と富田との關係から、自分と富田との關係の出來て行つた話などをも細々としてきかせた。『わからないものねえ。こんなにならうとは、私、その時分は少しも思はなかつたんですものね。縁ね、矢張……』など、言つた。

## 三十一

路は土手からだら／＼と下りて、工場に勤める人達の長屋の傍を通つて、眞菰や葎などの茂つたところから段々川の方へと向つて行つてゐた。そこに静かな二階屋が一軒あつた。ある晴れた日の午後、少しばかりの荷物を載せた一臺の車は、徐かに其處を通つてその前に行つて留つた。お衆と富田とがあとから續いた。

矢張工場に勤めてゐる夫婦者が住んでゐるのではあるが、室が綺麗なものと、川に近いのと、前の處よりはいくらか世離れがしてゐるのとで、二人は取敢へず其處を借りることにきめた。二人は二三日前に一緒に來てそこを見て行つた。

庭といふほどの庭もないが、兎に角樹木の多いのが富田の氣に入つた。残暑の赤い夕日の下には輝な

どが靜かに啼いてゐた。階下に住んでゐる夫婦者は、工場の方へ行つてゐることが多いので、つい此間までその二階を借りてゐた若夫婦は、下婢を一人使つて自分で總べての炊事をしてゐた。『私もさうするわ、』など、お衆は言つてゐた。

荷物を運んで行つた時には、昨夜夜業で遅かつたと言つて、上さんは晝寢をしてゐた。樹の間を透した日影は薄く二階の縁側にさして、涼しい風は川の方から來た。お衆は汗ばんだ顔を手巾で拭いて、『涼しいのね、』など、言つて、狭い裏の欄干の處に立つてゐた。下には鳳仙花などが赤く白く咲いてゐた。

暫くしてから、前で荷車の留る音がした。と思ふと、新しい箆笥の隅がちらりと見えた。『來たわ、早いのねえ。』かう言つてお衆は嬉しさうにして下りて行つたが、小僧を手傳つて、やがて富田はそれを二階に運び上げた。茶箆笥の方には、小さい硝子戸がはまつてゐた。

室の隅に、壁に寄せて置いて、お衆はすぐ自分の行李から着物を出してそれに入れた。『でも、あそこにあるんで、着物だけは出來たのよ。このお召は好い柄でせう、』など、言つて入れかけたのを出して富田に見せたりした。『これでも總桐ね……。いくらしたの？ 十五圓。これで結構ですとも。十分だわ。』ちよつと笑つて見せて、『貴方のも二三枚その中に拵へて入れませうね。』

長火鉢を古道具屋から届けてよこした。お衆は自分で出かけて行つて、近所の芋屋からそこに入れる灰などを買つて來た。早くきちんと家らしくして見なければ氣がすまないといふ風であつた。今度の移轉



について、富田の出した金はまだ多く残つてゐた。鐵瓶や湯わかしなどもお衆は買った。床間のがらんとしてゐるのを氣にしては、『貴方、今度來る時には、何か懸物を持つて來て頂戴ね。わるいんで好いから……。何かあるでせう。』など、言つた。二人はつゞいて蒲團を拵へる話などをした。お衆の持つて來た夜着の襟は汚れてゐた。

その他買つて來たものに、餉臺だの手桶だの茶碗だのがあつた。水差しは大きな土瓶で間に合せた。團扇や七輪や徳利などは、下から上さんが貸して呉れた。

聽て鐵瓶の沸く音が靜かに聞え出して來た。お衆はいかにも嬉しさうにして、長火鉢の前に横に坐つて、蓋などを明けて見て、『鐵氣は出ないでせうか。』など、言つた。派手な中形がよく似合つて見えた。茶を淹れて二人は楽しさうにして話した。夕日の深くさし込んで來るのを見ては、『簾を一つ買つて來なくつてはいかんね。』などと富田は言つた。お衆はお衆で、『此次ぎ入らつしやる時までには、綺麗にして置きますよ。花か何か買つて來て其處に置くと好いわね。……本當に綺麗にして置くわ、見違へるやうにね。』

移轉蕎麥を下へ持つて來る時分には、硝子瓶の徳利の二本目がもう鐵瓶の中に浸つてゐた。

『今日は馬鹿に酔が早い。もう赤くなつたらう？』

『さうね、かなり赤いわ。……私は？』

『お前もちつとは赤くなつた。』

『さう赤くなつて？』顔を撫で、見て、『本當に嬉しいわ。だけど、歌ちやんて言ふ人があるんだから心細い。』

『まだあんなことを言つてる。』

『だつてさうですもの。』

『まだ、わからないんだな。そんなわからないものかね、男の心は——』

こんな話を二人は笑ひながらした。二人は好い加減にして酒をきり上げて蕎麥を食つた。丁度その頃田圃を越した向うの長屋では、混雜した中で、女の行水を使つてゐるのが見えた。繩漉や洗濯物などに當つた夕日はもう薄れて行つてゐた。

夜になつてから二人は散歩にと外へ出かけた。二人は川の方へと先づ向つて行つた。其處には新しく出來た橋錢を取る橋などがあつた。大きな工場の窓の灯の中では、夜業のエンジンの音が高くあたりにきこえてゐた。

汽船のとまる小さな埠頭から渡場の方へ出て、垣に添つた細い道を通つて、二人は土手の方へと出て來た。川は溶々として流れてゐた。對岸の灯が二筋三筋、水に落ちて靜かに揺いてゐた。

櫻の葉のチラ／＼散る中を楽しい氣分で二人は歩いた。土手下には、灯の明るい酒屋や、野菜を並べ



た八百屋や、軒燈のおぼろげについた蕎麥屋などが並んでゐた。若い上さんの氷を削つてゐる店などもあつた。土手の奥のお宮のあるあたりまで行つて、二人は引返して來た。二人はやがて別な路を通つて家の方へと歸つて來たが、出る時つけて行つた二階の電燈は、遠くから明るくそれと指さされた。

## 三十二

俄かに暇になつたお糸は、講談や小説本などを近所の貸本屋から借りて讀んだり、前にもゐた家の上さんを誘ひ出して、活動寫真を見に行つたりして日を暮らした。下女の好いのではないのと、一つには下の上さんが飯位は炊いて呉れるので、強ひてそれを授さうともしなかつた。夜は遅く、朝は十時すぎまでも寢てゐた。貸本屋の亭主といふのは、髪を綺麗にかけた色の生白い男で、ぢき近くの役場に勤めてゐるが、お糸は今年五つになる女の兒を持つたその細君とやがて懇意になつて、半日其處に行つてお饒舌を續けたりした。可愛い女の兒はぢきお糸に昵んだ。

『私、清元を少しさらつて見ようかしら。』ある日かうお糸は富田に言つたが、その翌日から、お糸の姿は貸本屋の二三軒先にある格子戸のはまつた女の師匠の許に見えてゐた。師匠は二三年前まで——土地に出稽古に行つたものだが、年を取つて大儀なので、此頃では家に來るものばかりを教へてゐるといふやうな品の好い婆さんであつた。お糸は午前の一時間、時には午後の一時間を其處で過して、歸りに

はきまつて貸本屋の店に寄つて面白さうな本を借りて來た。細君と話してゐる間、傍に寄つて來る女の兒の頭を撫で、『子供つて本當に可愛い。私も欲しいけれどねえ。』など、言つた。男といふものを話の種にする時には、二人は聲を擧げて笑つたりした。『家のは、弱くつて仕方がないんですよ。』後には細君はこんなことを言ふやうになつた。

お糸は此頃よく化粧をした。高い香水や白粉下なども買つて來た。夕方になると、きまつて縁側の處に鏡臺を持出して、長い間かゝつて髪を梳いた。肥つた髮結が一日おきには屹度やつて來た。

富田は一週間に一度位はきまつて訪ねて來たが、待つてゐて來ない時には、溜息がひとり手に出た。さういふ時には、貸本屋の店に睦じさうに坐つてゐる夫婦が羨ましかつた。好い男を亭主にしてゐる細君が殊に羨ましかつた。亭主は莞爾して棚から本を出してお糸に渡した。手首の際立つて白いのがいづもお糸の眼に附いた。

『旦那がやさしくつて貴方は仕合せよ。』

こんなことを言ふかと思ふと、時には富田の來て泊つて行つた晩の惚けなどを細君に話した。『昨夜は喧嘩をしちやつたのよ。だつて、遅く來て置いて、今夜は泊つて行けないなんて言ふんだもの。男つて本當に勝手なものね。餘りだから怒つてやつたわ。』

體の爲めになるといふ食物の話、何うしてか此頃心から男が戀しくなつたといふ話、一夜でも獨りて



はさびしくつて駕方がないといふ話、さういふ話を二人は寄ると觸るとした。棚の奥にかくして藏つてある本を借りて來た時には、『大丈夫よ、體に毒になつたつて構はないわよ。』こんなことをお糸は笑ひながら言つた。

お糸はその女の兒を度々二階に伴れて來た。眼のくるつとした、西洋人形のやうな顔をした兒で、『小母ちゃん、小母ちゃん、』と言つてはよく跡を趁つて來た。近所の人達は、無邪氣なことを話しながら土手下の路を歩いて來る二人の姿をいつも見かけた。

本を讀んだり三味線を弾いたりするお糸の傍で、おとなしく遊んでゐる中に、不意に眠氣がさして、小さな手を疊の上に投げ出して、すやく／＼眠つて了ふこともあつた。お糸にはそれがたまらなく可愛かつた。お糸は小さな手だの足だのに觸つて見た。お糸は心から子供が欲しいと思つた。

『此處は小母ちゃんの家よ。』寢ぼけて、戸惑ひしたやうなキヨロリとした顔をして立つてゐるのを、傍に寄つて、しつかり抱きしめて、此方に伴れて來たりなどした。富田に向つては、『可愛い子でせう？ この位の中が一番可愛い盛りね。こんな子が一人あつたら、何んなに好いだらうと思ふわねえ。お仙さんが子供に夢中で、男のことなんか何とも思つてゐないのを不思議に思つてゐるが、かういふ可愛い子があれば、さうかも知れないと思ふわ。』

始めは富田の鬚の多い顔や、ピカ／＼光る眼鏡などを怖いものゝやうに思つてゐるが、後には段々馴

れて、手を出すと、その傍に行つて抱かれた。後には富田も玩具などを買つて來た。

ある日、お糸は富田に言つた。『此間、歌ちゃんに逢つちやつた。』

それは貸本屋の細君と女の兒と三人で活動寫眞に行つた歸途であつた。お糸は此處に來てからは、成たけ女中達や知つてゐる人達に逢ふのを避けて、いつも川の方から汽船に乗つて出かけて行くのを例としてゐるが、その日は土手に上らうとするところで、向うから來る歌子の車にばつたり出會つた。歌子は奥の料理屋へ行く途中らしく、ヴェールなどをしてゐた。それでもちよつと頭を下げた挨拶して行つた。

『私の此處にゐるのを皆な知つてゐるかしら。』かうお糸は考へるやうにして言つたが、『貴方、逢つてゐるんでせう此頃？』

『逢つてやしないよ。』

『逢つてるのよ。』

『そんなら、さうして置かさ。』

そんな話は時々出たが、富田はいつもそれを否定した。『だつて、きまりがわるくつて、あそこにはもう行けやしないぢやないか。勘定がまだ少し残つてゐるんだけど、それさへやらすにあるんだよ。』

『だつて、他にいくらもお茶屋があるもの。』

此頃では、二階の間とは見違へるやうに綺麗になつてゐた。床の懸物も出來れば、夕日を遮る



簾も出來た。壁には鬱金の袋に入つた三味線がかゝつた。裏の欄干のところには、秋草の小さい盆栽などが置かれた。お糸は朝に夕にそれに水を灌いだ。

## 三十三

朝早く富田の姿が渡場のところに見えてゐることなどもあつた。秋になつてから、川の水は著しく澄んで、向うの岸の新しい二階や、樹木や、石を積上げた塀や、小さな雁木などが朝潮の満ちた上にはつきり映つて揺いてゐた。汽船のまだ來ない小さな埠頭の傍には、荷を一杯に積んだ船が靜かに往つたり來たりした。あらゆるものが總て皆な生々として爽かな色を着けてゐた。上流の大きなガス溜の周圍には、煤煙が勢よく渦を卷いて漲り渡つて見えてゐた。

垣に添つた道には赤い白い木槿が咲いてゐた。蓮の葉はやゝ窳れて土手の櫻はバラ／＼と散つた。富田は工場の方へ出かけて行く労働者の群に其處此處で逢つた。工場の汽笛の音は彼方此方から聞えて來た。一日毎に寂しい秋はやつて來た。蟲の音は枕に近く、月が晝のやうに裏からさし込んで來る夜もあつた。蚊はもう餘程少くなつてゐた。秋雨が幾日か續いて降つたあとに、日がくわつと照つて、田圃の上には赤蜻蛉などが飛んだ。お糸は富田の來るのを毎晩のやうに待ちながら、新しく出來たふつくりした蒲團の上にひとりて寢た。

## 『一晚貸して頂戴。』

時にはお糸は女の兒を無理につれて來て一夜抱き緊めて寢ることなどもあつた。お糸は端唄などをひとりて弾いた。

ある夜下の上さんの持つて來て呉れた郵便には、附箋が澤山についてゐた。手に取つて一目見たお糸には、その差出人の誰であるかゝわかつた。それは兵營に行つてゐた人からであつた。お糸は封を切つて長い長い手紙を読んだ。男は病氣で、兵營から歸つて、今では國でぶら／＼してゐた。肺病らしい容體であつた。

手紙には種々なことが書いてあつた。熱いさびしい男の心が其處にも此處にも見えた。お糸は別るゝともなくいつとなく別れて行つた徑路を頭に描いた。互に逢ふことの出來ないやうな境遇から段々覺めて行つたやうな戀であつた。それに、男は弱い性質で、氣象もはき／＼してはゐなかつた。お糸は手紙を膝の上に置いてその時分のことを思ひ耽つた。

續いてこの春二階で逢つた男の事も思ひ出されて來た。『何うしてゐるだらう』などゝも思つた。浮草のやうに、かうして段々移り變つて行く自分の身も離つて考へられた。お糸はもう二十三になつてゐた。貸本屋の睡ましい夫婦の仲に自分の身を引較べて、最初に持つた亭主を思ひ浮べて見た時には、厭な厭な氣がした。その爲にかうなつて行つた自分の生涯のやうにも思はれた。お糸は手紙を丸めて、立つ



て裏の欄干の方へ行つた。秋雨がさびしく音を立て、降つて來てゐた。

三十四

夜遅く來た時には、富田はひどく酔つてゐた。二階にあがるとすぐ着物も脱がずに蚊帳の中に入った。お糸は金盥に水を入れてそれを枕元に持つて來て置いた。

『何うして、そんなに酔つたの?』

かう訊いても、

『うん……酔つちやつた。』とばかりで、さも苦しきうにすぐ彼方に向いて了つた。手足をだらしなく疊の上に投げ出した。

『まア、着物だけお脱ぎなさいよ。』お糸は強ひて寢巻に着替へさせて、蚊帳の外でそれを疊みながら、袂の隅々を隈なく探した。酒の香の染みた手巾と丸めた紙とが出て來た。

女の移香もした。

お糸は黙つて蚊帳の中に入つて、長い間其處に坐つてゐた。室の隅の方に引張つて行つてある袋をかけた五燭の電燈は、微かに寢巻すがたのお糸を照した。お糸はぢつとして身動きもせず、暫く坐つてゐるが、やがて微かな溜息をついて、男に脊を向けたまゝ、小さく横になつた。男の苦しきうに寢返りを打

つ氣勢がした。

しかし一時間後には、二人はいつか顔を合せて話をしてゐた。

『もうさめて?』

『大分醒めた——』

『何處でそんなに酔つたの?』

『友達と川の向うに行つてね——えらく酔つちやつて、此處に來るのもやつとだつたよ。よく路を忘れなかつたらう!』

『川の向う? さう川の向う?』

お糸はわざと笑つて見せた。

『何故?』

『だつて、私だつて、その位のことわかるわ。歌ちゃん、何つて言つてゐて? 私のわる口を言つてゐたでせう。』考へるやうにして、『男つて當てにならないものね。貴方も矢張信用の出來ない人ね。』

『何故だえ? また、疑つてゐるのかえ?』

『好いのよ。』

お糸は男の方に脊中を向けて了つた。



『本當だつて言ふのに……』

『厭……。今日行つたところをすつかり話して聞かせなければ厭……』

『ぢや話すよ。歌公がよろしくつて言つてゐたよ。』

『知らない。』

お糸は肱で男を強く衝いた。富田は、『でも、この通りへゃれけに酔つて歸つて來たんでも無事だつたのがわかるぢやないか。うんと惚氣をきかせてやつたよ。散々人を酷めた罰だ。』

『ぢや、貴方、私のことをすつかり話しちやつたの？』お糸は俄に起き返つた。

『何アに、詳しく……話しやしないよ。富田は慌て、言つて、『好いぢやないか、話したつて構ひやしないよ。』

『知らない。知らない。』お糸は身を悶えて見せた。

暫く黙つてから、

『そして、何處なの？ 一體、春月？ 花の家？』

『まアそんな處だよ。好いぢやないか、何處でも。』

『春月よ、屹度。』

かう言つたが、『あそこで始終逢つてゐるんでせう？ それに違ひないわ。此間早く歸つた時にもあそ

こに行つたんだよ。』

『そんなことはないよ。あれから今日初めて逢つたんだから。』

『うそばつかり！』ちよつと間を置いて、『そして何て言つて……？』

『お上のことを言つてたつけ。』

『何つて？』

『あれでは女中が可哀相だなんて。』

『貴方、そんなことを聽いて來たの？』かう言つたが、急に眞面目な聲になつて、『私、お世話になつて居てもお氣の毒だから、何處かに行くわ。元を言へば、私があるんだもの……貴方はほんの出來心でやつたことなんだから、お世話になつてゐる方が間違つてゐるんですよ。私が馬鹿なんですから。』

『何故だえ？ 何故そんなことを言ふんだえ？』

『だつて、さうですもの。私が馬鹿で勝手にかういふことになつたんですよ。私があるんですけど……誰を恨むせきはありませんわ。貴方だつて、よくして下さるんですよ。今度だつて、大變お世話になつたんです。』いやに聲を細くしたと思ふと、お糸の眼からは涙がいつかこぼれかけてゐた。

富田は慌て、『そんな風に思つて呉れちや困るよ。行つて逢つたのがわるければ、あやまるよ。そんな氣で行つたんぢやないんだから、本當にさうなんだから。』お糸の方に體を寄せて、『おい、本當に、勘



忍して呉れ。』

『いゝえ、それ處ぢやないわ。こんなにお世話をして下さつて有難いと思つてゐるんですけど……。けども……けども……』言ひかけてお糸は蒲團の上に突伏して了つた。涙が止度もなく出て來た。歎げらる度に、銀杏返の鬘の揺くのが微かに電燈の薄暗い光線の中に見えてゐた。

『本當に勘忍して呉れ。僕がわるいんだから。え、え、勘忍して呉れる？』かう言つて顔を寄せて、女の體を抱へるやうにして、『本當に、そんな風には思つてゐはしないんだから……』

男の腕に抱へ上げられたお糸の白い頬は、名残なく涙に濡れてゐた。自分ながら不思議に思はれるほど、あとからあとへと涙が出て來た。お糸は長い間顔に手巾を當てゝゐた。

富田は種々になだめすかした。『本當にそんな風に思つてゐやしないんだから。』かう繰返して言つて、富田は、わざと女の顔を覗き込んだりした。富田の酔はずつかり覺めてゐた。やがて涙の過ぎて行つたあとには今度は甘い悲しいしんみりした情が二人の胸を占領して來た。二人は俄に心と心の觸合ふのを感じた。

## 三十五

心の蟠りの解けて流れて行つたあとには、やさしい情味が溢れて漲つて來た。それは眞面目な情緒を

持つた喜悅で、お糸の心は前よりも一層深く男の方に向つて展げて行くと共に、男もこのやさしい女心を離し難いやうな氣がして互ひに堅く手を握り合つた。他に女があらうがあるまいが、この男の情は忘れられないといふ風にお糸は思つた。

『あれのことなんか、本當に思はないたつて好いんだよ。あいつ等は稼業にしてゐるんぢやないか。あいつ等は商賣品だよ。僕だつて、君のことを思つてゐなければ、かういふ風に世話をする譯はないんだからね。そこを考へて見れば、すぐ解るぢやないか。』

『それは解つてゐるわ。だけど、私のことだつて考へて見て下さいよ。私、一人でかうして二階にゐるんですけど、時には淋しくつて爲方がないこともありますよ。毎晩、待つてゐるんですけど、貴方の來るのを……』かう言つて笑つて見せて、『今度はもつと近く來て下さい。この間來てから十日目になるのよ、今度は。三日目位に來て下さると好いんだけど……』

『さうは行かないけど……』

『お家の都合もあるんでせうけどもね。私、一人でさびしくなつて了ふ……。今度のやうに來て下さらないと、何うかしたんぢやないかとすぐ思ふのよ。矢張始終一緒にゐて下さらなければ物足りないわねえ。』お糸は何か思ひ出すやうにしてほろりとした。

『成たけちよいちよい來るやうにするよ。』



『酔つてな、か來ちや厭ですよ。』

富田は黙つて笑つてゐた。

お糸が此間來た男の手紙を富田に見せる時分には、富田も歌子の話をちよいちよのお糸に聞かせた。歌子の話だと言つて、富田はその大きなお茶屋の話などをした。『へえ、さう、お仙さんが采配を振るやうになつたんですか。さうだらうと思つた。あの人も出るなんて言つてゐたけれども。何うしてあの人が出るもんですか。お定さんを出すやうに出すやうにとばかり仕かけてゐたんですもの。それをお定さんは知らずに、お上さんがわからないつてばかり言つてゐるんだもの。お定姐さんはごくずるい人が好いんですからね。』かう言つたお糸はお茶屋にゐた時分のことなどを繰返して考へてゐた。

電燈の微暗い中で、二人は種々のことを話した。下に寝てゐる上さんは、富田が酔つて入つて來た時から眼が覺めて、それからすつかり眠られなくなつて了つたが、二階の話聲は、初めは強く、中頃は靜かに、ちよつと途切れたかと思ふと、今度はまた靜かな私語が長く、續いた。女のひそやかに笑ふ聲などもした。

『いやですよ、貴方は。あの人のことばかり考へてゐるんですもの。』かういふお糸の聲がやがて際立つてはつきり聞えた。あとはしんとした。

お糸は男の話の中から絶えず歌子の面影を捜した。歌子は例の美しい表情と巧みな腕とで男の心を自由にあやなしてゐるらしかつた。春月で逢つてゐるばかりでなく、もとのやうにそのお茶屋にも出かけて行くらしかつた。女將や女中のことを富田はよく知つてゐた。

お糸をかうして圍つて置くといふことも富田はよく歌子に話して聞かせる様子であつた。そんなことはないやうに常に辯解はしてゐるけれど、話をしてゐる口裏からすぐそれがわかつて行つた。さうした社會のことに詳しいお糸には、何も彼もはつきりと判斷された。女に逢つて來た時と逢はずにやつて來た時との區別は、一目見てすぐ飲込めた。

利口な歌子は、お糸のわる口などは少しも富田にはないらしいが、それに引かへて、富田は歌子のわる口をよくお糸に言つた。後にはお糸は、『實はさうぢやないんでせう。憎いんぢやなくつて可愛いんでせう。わる口もお惚けの部でせう。』など、言つて笑つた。

心と體とを合はせて、お互に泣いたりあやまつたりして見たところで、それはその時ばかりで、何うにもならないものだつた。自分に對してもかなりの愛情を持つてゐながら、一方では歌子の體から離れることの出來ない男の心といふやうなものも、矢張何うにもしやうのないものだといふことが段々お糸にもわかつて來てゐた。

初めはお糸は富田とわかれる時のことを常に想像した。戀しいのが昂じて、後には辛く悲しく、かういふ思ひをする位なら、いつそ別れた方がなどと思ふこともあるが、それは自分で自分の疑惑の影を大



きくして行つた時で、別れてからのことを考へると、さびしくつてとてもそれは堪へられないやうな気がした。富田の體は離れられずにしつかりお糸に絡みついてゐた。お糸は其處に行くと、いつも突當つて了つた。後には、自分で世話になつてゐるから、自分の思ひが心から男に通じない。いつも當つて了つた。後には、自分で世話になつてゐるから、自分の思ひが心から男に通じない。いつそ自分で苦勞して男に入揚げて誠を見せたらなども想像した。『今に、私の心を見せて上げますから。』お糸はかう富田に言つた。

……妙見さんへ願かけて、

かへる路にもその人に、

逢ひたや見たやこひしやと、

こつちばかりで、先やしらぬ、

しん氣らしいぢやないかいな、

かういふ唄を師匠のもとで教はつた時には、『好いわねえ』と言つて、すつかり覚え込むまで、お糸は何遍となく弾いて見た。男戀しい女心は昔の唄の文句の中にも闇夜の星か何ぞのやうに澤山にかゝやいて残つてゐた。お糸は家に歸つて來てからも、三味線を下して、裏の窓の處に坐つて、靜かな調子で猶ほ二度も三度もそれを弾いた。お糸の頬にはいつか涙が流れて來た。

三十六

ある日、師匠は何處から聞いて來たか、踊の上手なので名高い桃子といふ藝者が、ある男に夢中になつてゐる話をお糸にしてきかせた。『桃子ちゃん？ まア、あの桃子ちゃんが？』

お糸は眼を丸くした。

容色こそそんなに好い方ではなかつたけれど、檢番のお照をばさんの養女で、小さい時分から藝事を仕込んで、土地でも五本の指に數へられる妓であつた。つい昨年あたり好い旦那が出來て、新しく家を持つに就いても、その旦那のつぎ込んだ金は、ちつとやそつとのことではないといふ噂であつた。おとなしくつて堅くつてそれでゐて何處かしつかりしてゐた。富田も最負にして、いつもよく聘んでは『春雨』などをどらせた。

『お前さんも知つてゐるけど、あのおとなしい妓でせう。そんなことがてきばき出來ようとは何うしたつて思はれやしないよ。それが、お前さん、自分でちやんと旦那に斷つたんだつて言ふからね。お暇を頂きたいつてちやんと自分で言つたんだとき。尤も、その前にも旦那が不思議にしたことがあるんだつて。ある日、行つて見ると、前の格子に鍵がかゝつてゐる。おいおいつて呼ぶと、桃子ちゃん、障子をあけて顔を出したつて、あの、今日はお人ですから、すぐ參りますからお茶屋の方へ行つてゐて下さい』



言ふんですつて。不思議だと思つたんですつて？ でも、ねえ、あのおとなしい妓だから、そんなことはないと思ふし、姐さん方だつて、あの妓に限つて、そんなことはないつて言つてゐたんだつて。それがお前さん、ときば旦那には自分から斷る。檢番のお照さんには、これまでの御恩は忘れないけども、清算をして關係を斷ちたいつて申込んで行つたんですとさ。』

『男つて何ういふ人？』

『その人だかわからないけれど、何でも、賭博打の岩何とかいふ親分の息子か何かで、名代の女たらしだとき。その人なら、よし町あたりちや聞えたもんだつて。その男が通ると、彼方でも此方でも女の子が鼠鳴きをするやうな男なんだつて。何でも五人や六人は眞裸にされて放り出された藝妓もあるんだつていふことだよ。上さんも子供もあるんだつて言ふけれどね。』

『まあねえ……』

『多分、その男だつて言ふ話だよ。悪いものに引かゝつたものだつて、昨日妹の處に行つたら話してゐましたよ。妹はよし町にゐたことがあるから、よくその男のことを知つてゐるんですよ。その男に上さんが出来ない前は大したもんだつて？ 意氣な扮装をして、十五兩もする下駄などを穿いて、鶯の籠でも持つてすらり／＼歩くといふ風なんだつて、そしてその男が通ると、お酌さん達が、アとかトとか言つて手眞似をするやうな人だつたつて？ 今度も女房を出して、お前をあとに入れるつて桃ちゃんに

言つてゐるんだとさうだけれども、それが手なんだとき。今に、すつかり剥かれて、放り出されて了ふんだらうつて、それは評判だよ。』

『まあ、さうですかね。あの桃ちゃんか。あのおとなしい人がね。』お衆は溜息をついて深く考へるやうな顔色をした。

師匠は話をつゞけた。

『それに、さういふ男だから、子分が澤山にゐるから、かなはないよ。イザとなると、當人は知らん顔をしてゐて、子分が何うかして了ひますからね。さういふ人にかゝつては大變だよ、お前さん。』

『さうね……そして、それはいつから始まつた話なんでせう。』

『なんでもこの四月頃からだつて！』

『四月？ よくわからないでゐましたねえ。よくあのお照をばさんが知らずにゐましたねえ。』

『それといふのもお前さん、あの妓がおとなしいもの、誰もそんなことをしやうとは思はなかつたんだもの。』

『さうねえ。』と言つて、お衆は考へて、『それまで誰も知らずにゐたんでせうか？』

『先月あたりから、すこし變だとは勘付かれてゐたにはゐたんですと。何時行つて見てもあそこの家の格子の鍵がかゝつてゐるんですつて。妹の家にある抱妓があの人と懇意で、ある日一緒に芝居に伴れ



て行つてやるつて言ふんですつて！ そして支度が出来たら待つてゐて下さい、私の方から行くからつてかう言ふんですつて。いゝえ飛んでもない、こちらが上りますつてね、何しろ先は一流の姐さんだから、早目に支度をして行つて見ると、矢張鍵がかゝつてゐるんですとさ。そして何故私の方から行くつて言つたのに、來たつて言つて何うしても中に入れないんですつて。何でもその時にも男の影が奥に見えてゐたつて。旦那ぢやなかつたつて！』

『それぢや、始終家で逢つてたのね。』

『だから今日までわからないでゐたんだよ。お茶屋さんならすぐわかるんだけど。お茶屋では、春月に一度とか二度とか行つたことがあるさうだけれど、その時も男は早く歸つたんだつて……。あのお照さんのことだから、かねぐさういふことにも氣を配つて、家を持つ時にも堅い婆さんをつけてやつて置いたんだけど、その婆さんもすつかり向うに虜になつて了つたんだね。お照さんが聞いても、いゝえそんなことはありませんつて言ふもんだから安心してゐたんですとさ。それが、わかる時には小さなことからわかつて行くもんだね。そら、自分が大勢來て飲んだり食つたりして行くでせう。何うも米がいりすぎる、香の物がいりすぎるつていふ處から段々知れて行つたんだと……』

『餘程深く打込んだのね。』かう言つたお糸は、桃子の姿を頭に浮べて見た。容色がないから堅くしてゐられるといふ妓であつたことをお糸は思ひ出した。涙脆いやうな質で、女將に叱られて年に似合は

ずお座敷で眼を赤くしてゐることなどもあつた。お照をばさんの難しいことなどもよく零してゐた。二十三にもなつて、まだ心から男の情を知らないといふ風な妓であつた。『騙されてゐると思へば、可哀相だけでも、それまでに思込んで男に惚れ、ば本望には本望ね。』かう言つたお糸の胸には、しんみりした同情が湧くやうに上つて來てゐた。土手を家の方へ歸りながら、お糸は種々とそのことを思つた。さういふ脆い女心を玩弄にする男心が憎いといふよりも、さうまで惚れて行つた女心が羨ましかつた。その日一日桃子の姿はお糸の頭を離れなかつた。

その話を富田はもつと詳しく知つてゐた。つきものがわるいので、檢番のお照をばさんもあきらめて桃子が申込を承諾したが、清算の結果、桃子が少からぬ金を出さなければならぬことになつて、旦那に拵へて貰つた衣裳やら帶やら時計やらを大抵質に置いたり賣つたりしたといふことであつた。『もう、あのダイヤなどもありやしないとさ。』

『さう、あのダイヤも……』

お糸は驚いたやうな顔色をした。

それはさういふ仲間にも評判になるほどの大きなダイヤで、誰も彼も皆な羨望の眼を睜つたものであつた。お糸もよく知つてゐた。歌子もちよつとお座敷で借りて自分の指にはめて見て、『好いわねえ、私も一つ欲しい、貴方買つて頂戴よ。その位の心意氣を見せるものよ。』など、言つたことがあつた。



## 『可哀相ね。』

『さうさ、可哀相だと言へば可哀相だが、しかし自分の心からさうしたんだから、悔むところはな  
いさ。あの社會にも、さういふ事件が時々あるから面白いんだ。矢張、人間だからな。いくら稼業にし  
てゐても、金ばかりちや駄目だからな……。それは金ばかりのやつもあるさ。金さへ取れや好いつてい  
ふ奴が當世さ。しかし、さうしてゐられないところが面白いぢやないか。生物だからな。富田はこんな  
ことを言つて笑つて、』

『しかし、今度のことはあの女などにはありさうなことだよ。中年から藝者になつたんなら、もつと  
わるく賢くなつてゐるんだけど、藝こそあれ、あゝいふ容色で、あゝいふむづかしい養母を持つて、自  
分の本當の願はこれまですこしも満足させられたことがないんだからな。目が覺めたんだよ、覺醒した  
んだよ。散々剝かれて女郎にでも賣られるか。それともまたさういふ色師を自分のものにするものが出  
来るか。そこが面白いぢやないか。當人のためには少くとも眞劍のことだからね。本當の意味から言ふ  
と、却つて幸福だよ。』

『でも、夢中で、先が見えないんでせうからね。』

『夢中になつたのが面白いぢやないか。意味があるぢやないか。盲目にならずに、勘定ばかりして燃  
えもせずに、ぶすくくすぶつて一生を終つて了ふやつが澤山にある世の中だ。それを、兎に角、燃え

のは面白い。その爲めに始めてあの女の價値が出て來たといふやうなものだ。僕はそこを賛成だ。』

『それはさうですけども、見すくくだまされてゐるのがわかつてゐては可哀相ね。あの人はやさしい  
んですもの。今の秀奴さんの旦那だつて、もとは桃ちゃんの旦那だつたんですものね……。あの時だつ  
て可哀相だつた。何ともないわ。』など、平氣で言つてはゐるけれどもね。』

『矢張何處か面白い處のある女なんだよ。』

『ちや、私もさうしようかしら。』笑ひながら戯談のやうに言つたお衆は、『でも、私のやうなものは駄  
目ね。……相手がないもの。』

『相手があるなしぢやないよ。惚れるつていふことは、惚れられるから惚れるつて言ふものぢやない  
からね。』

『それはさうね。現に、私なんぞそれよ。』

『何うだか。』

富田は笑つてゐた。

『さうよ、本當に……。』かう言つたお衆はすぐ話頭をかへて、『さうして、何うしてるの？ 一緒にゐ  
るの？』

『丸髻なんかに結つてゐるさうだ。』



『男も來てるのかしら。』

『さうらしいよ。兎に角評判だね。何處でもその話ばかりだよ。あの女がさういふことをしたといふことが非常にめづらしいと見えるね。それから、あのお照を皆さんの監督の下で、さういふことが出来たといふことも並でないといふ風に思はれてゐるんだね。』

『それはさうでせうね……。それにしても、一體初めは何うして出来たんでせう?』

『何でも稽古の途中か何かで出来たらしいよ。だから、今まで知れないでゐたんだよ。稽古に行くんだつて言つちや、朝の八時頃から三四時位まで始終内を明けてゐたつて言ふからね。その位時間があれば、どんなことでも出来るからね。』急にふと思ひ出したらしく、『さう言へば、常子が置手紙をして、家出をしたさうだよ。』

『常ちやんが?』

『僕も吃驚したよ。本當にこの頃はいろんなことがある。此間、友達を呼んで會をした時ね。あの時常子も桃子も皆な來てゐたんだからね。まだいくらも経ちやしない。二た月位にかなりやしないよ。』

『さうね。考へるやうにして』矢張、あの兄さんかしら。』

『さうらしいよ。』

『あの人は黙つてゐる質だけでも、何處かしつかりしたところがあるから、さういふことが出来るん

ですよ。でも、本當にあの兄さんかしら?』かう言つて間を置いて、『本當にいろんなことがあるわね。

一と月と言はれないわね。』

お糸の眼の前には、種々な人が映つたり消えたりした。移り變りの烈しいのが今更のやうにお糸には思ひ廻された。かうして話してゐる富田とも、いつ別れて行つて了ふかわからなかつた。泣いたり笑つたりして過ぎて來た自分の姿が其處にも此處にも見えた。さういふ人達に比べて何うなつて行く自分だらう。お糸は黙つて富田の盃に酌をした。

お糸は不意に富田に言つた。『そして、貴方は本當にこれまでに眞劍に女に惚れたことはあつて?』

『それはあるとも……。眞劍に惚れて、羹湯を飲ませられるやうな思ひをしたのも二度や三度ぢやないよ。だからこんなになつちやつたんだ。』

『何んな事があつたの?』

『それは澤山あるよ。數へ切れないほどあるよ。僕も何方かと言へば、すぐ眞劍になつて了ふ方だからね。十六七時分からもう眞劍の戀をしてたんだよ。』

『だつて、その時分は唯、綺麗に思つてゐたばかりでせう。』

『十六七時分には、まださうだがね。三度目位にラブした女には、もう思つてゐるばかりでは満足が出来なくなつてゐたよ。これでね、僕がもう少し好い男か何かで、女が向うから寄つて來るやうだと、



とても身は持てなかつただけだね。』

『一番惚れた女は？』

『それは二十五六の時だがね。その時は死んで了はうかと思つた位だよ。ラブした女は皆な中年の男に取られて了ふんだからね。僕のやうな貧乏書生などは相手にして呉れやしないからね。……始終、青い顔をしてふさぎ込んでばかりるただよ。話せば、面白いことがあるけど、面倒臭い。』

『少し話して聞かせて下さいよ。』

『一番ひどい眼に逢つたのは、友達に取られて了つた時だつたよ。わかつたやうな顔をしてゐても、まだその頃は、存外色戀なんて本當にわかつてゐるやしないんだからね。三人一緒に睦じく歩いたり遊んだりしてゐる中に、いつかその女が友達のものになつてゐるのを知らずにゐただね……。その時は随分痛かつたよ。初めは自分のものだつただからね。悲觀して山の中に入つて半年ほどゐても、その傷痕は治らなかつたよ……。それからもう一つ、これは餘程あとのことだがね、かなり眞劍になつて世話をしてやつた女があつたんだ。さうだよ、素人ぢやないんだよ。ところが好い加減絞られたところで、うまく寢がへりを打たれて了つただね。その時もかなり辛かつた。しかし、そんな話をいくらしたつて際限がない。』

『好いから話して聞かせて下さい。その女、今何うしてるの？』

『矢張、何處かで棲を取つてゐるつていふ話だよ。でも……。その時分からだね、段々色戀のことが少しづつ、わかつて來たやうな氣のしたのは。惚れるといふところから、本當のことがわかつて來ただね。人間は一度やつたことを二度やる時には、前よりはいくらか利口になつて來てるからね。』

『それはさうね』

『お前にもあるだらう？』

『私なんか、何にもないわ。』

『ないことはないぢやないか。兵隊さんのこともあるし、それから二階に來た男のことだつて。』

『女なんて駄目ですよ。捨てられたつて、男のやうに眞劍になることは出來ないんですよ。いつだつて泣寝入ですよ。』

『でも少し話してお聞かせよ。』

『何にもありやしないわ。本當に女は話らないもんですよ。向うにゐる時には、私は働きに生れて來たのかしらと思ふ位でしたもの。でも、小間物屋にゐれば好かつたとは思ひませんね。餘程イヤだつたんですよ。』

いろ／＼身の上が思ひ廻されるといふ風で、ちつと考へ込んでゐたが、『私なんか、何うなつて了ふかわからないわねえ。』



『そのうち好い亭主をさがすんだね。』

『私なんか亭主が持てるでせうか。』

『それは持てるさ。そのうち一つ好いのをさがしてやらうか。』

『澤山。』

かう言つてさびしさうな顔をして、『貴方は矢張情がないわね。』

『情がないんぢやないよ。わかい時の情が枯れちやつたんだよ。これでも、お前が他の男でも拵へて此方のことを構はないやうになると、熱くなつて行くんだよ。』

『それは情ぢやないわ。……矢張情がないわねえ。』

『そんなことはないよ。あれなんかには、男の心持はわかりやしないよ。桃子のやうな飛離れた幕は何うせ打てない女だからね。矢張勘定連だよ。一生あんなにして、眞剣に腹も立てず、眞剣に人も思はずに、ぐづくに世の中を送つて行つて了ふんだね。男は唯、金さへ巻上げれば好いもの、女は體を貸しさへすれば好いものとはかり思つてゐるんだからな。桃子のことなんか、馬鹿な智慧のない女とばかり映つて見えるんだね。面白い世間話の一つ位にしか考へられないんだね。』

『あの人はしかし利口ですよ。他の土地から来て、まだ二三年にしかならないのに、あんな姐さんになつたんですからね。女將がよく言つてたわ。歌ちゃんが来た時分には、それはよく稼いだもんだつて。』

あんなわかりの早い妓はめづらしかつたつて言つてゐたわ。でも、いくら利口でもあの役者だけは忘れられないんでせう。』

富田は黙つて笑つてゐた。歌子の話になると、お糸は不思議にもつよい敵意をむき出しに見せて来た。富田は話をやめて裏の欄干の處に行つた。お糸は傍に寄つて来て、

『私、こんなことを此頃よく考へるのよ。今から五六年経つたら私は何うなつてゐるだらうつて。夜ひとり寝られないでゐる時などには、ことにさうよ。私は身寄と言ふものがないから一層さう思ふのかも知れないわねえ。本當に私、一人ぼつちですものね。伯父や伯母はそれでもまア心配して呉れるけれど、親がゐらないつて言ふものは悲しいものですよ。本當に何うなつて了ふでせう。その時分になつても貴方は力になつて呉れるかしら？ え？ 力になつて下さる？ 私と別れて了つてからも。』

『それはなつてやるさ。』

## 三十七

貸本屋の女の兒を借りて、頼摺りして一緒に寝るやうな日が幾夜か續いた。富田は來たり來なかつた。お糸に取つては、容易に眞剣になれない男の心が何だか頼りにならないやうな氣がした。單に玩弄にしてゐるのではないのは、それはよく解つてゐた。かうして遊んでゐても困らないだけの手當を



十分に呉れるのも有難いとは思つた。しかしそれだけではまだ満足が出来なかつた。お糸はさびしく暮らした。

お糸は將來のことなどを多く考へるやうになつてゐた。かういふ生活が到底長く續くものでないといふことも考へた。お糸は桃子やお梅やお秀のことなどを思つた。

『お前さん、そんなことを言ふのは贅澤ですよ。好い旦那さんぢやないか。』富田に度々物を貰つたりする下の上さんは、お糸のさびしがつてゐるのを見ると、いつもかう言つて慰めた。

ある日、師匠の許でお糸は笑ひながら言つた。『私、藝者にでもならうかしら。もう少しお稽古したら……』

『お前さんなんか、いくらでもならうと思へばなれるともさ。容色はあるし、藝だつて、お前さんより出来ない人はいくらでもあるんだから……。妹の家に此間目見得に來た妓なんか、それはペンともシャンとも言へないやうな妓だよ。それで、今までよし町にゐたんだとさ。藝なんかなくなつたつて、いくらでも藝者で候つてゐられる時世だからね。』師匠はかう言つて、自分が此土地で賣つてゐた若い時分の話を自慢さうにして、『それは忙しかつたもんだよ。一日に四座敷や五座敷するのは當り前で、忙しい時には家に歸つてゐる隙もなかつた位だからね。……その爲め今の妹なんか大きくなれたんだよ。それにその時分には好い旦那もあつて世話をしやうといふ方もあつただけけれど、若い時分には意氣な藝

人か何か、好きなもんで、矢張、あの桃子さんのやうなもんだアね。その爲めに、好い目も出さず終ひになつて了つたのさ……。それでも好いた男と一緒になつたにはなつただけけれども、なつてからは碌なことはなかつたよ。』

『矢張苦勞をして來たんですね。』

『その代り面白いこともあつたよ。三十五六位までは、イヤならいつでも別れてやる。未だ相手にして呉れるものはいくらもあるからつていふ腹でゐたからね、お前さん。でも、四十二三になつてからは流石にもう駄目だと思つたね。』

こんな話をして師匠は笑つた。然し、内情に詳しいお糸は、進んで藝者にならうとも思はなかつた。不見轉の生活は慘めなものであつた。お糸は夜遅く白粉を白く塗つて箱も持たずにやつて來る女を頭に描いた。

## 三十八

『貴女は仕合せよ。』かういふ言葉をお糸は度々貸本屋の細君に言つた。三人一緒に話してゐる時にも、お糸は絶えずその亭主の濃い髪や色艶の好い唇を見てゐた。長烟管に煙草をつめる白い手首なども眼に附いた。



静かな口の利き方をする人で、『お才や、お才や、』といつもやさしく細君を呼んだ。女の兒も何方かと言へば父さん子で、『父さんと母さんと何方が好き?』など、訊くと、始めは黙つてゐても、『父さんの方でせう。』かう言はれると、笑つて小さく點頭いて見せた。夜など行くと、店の處で、亭主はあぐらをかいて女の兒を抱いてゐた。

『駄目ですよ。うちのなんか、働かないから。』こんなことを言ふ細君の口裏からは、絶えず生計の苦しい愚痴が零されてゐた。しかしさういふやさしい男となら、不足勝な世帯を切り廻して行くのも樂しみだらうとお衆は思つた。

何うかすると、細君の用足しに出たあとへ行つて、女の兒を中に置いて、二人で長い間世間話をするなどもないではなかつた。夕方にはお衆はいつも湯に行つて、綺麗にお扮装をして、セルの着物に黒緋子の帶などをしめてゐた。店頭に坐つて話をしてゐると、土手の上を通る人達は何處の女だらうといふやうに、めづらしさうにして此方を見て行つた。

十月の中頃になつてから、雨が續いて降つた。時には一日外に出られないやうな吹降の日もあつた。河の水は夥しく増して、黄く濁つた色が鼠色の空氣の中に氣味わるく漲つて見えた。橋杭に當る水は凄じく渦を卷いた。

三四年前の洪水の話などがもうあたりの人達の口に上るやうになつてゐた。『あの時はひどう御座んしたよ。何しろ土手から此方ですからね、すぐ水がかぶつてしまふんですからね。油断はしては居られませんか。』など、下の上さんは言つた。

貸本屋の亭主は、『なあに、貴女の家は二階があるから大丈夫ですよ。あの時だつて、二階までは來はしなかつたんですから……。え、好う御座んすとも、その時は行つて上げますとも。』かう言つてその時の話などをした。

溝がひらいて、塵埃が汚なく流れ出してゐる路を、高い足駄を穿いて、泥濘を拾ひながら歩いて行く人達の姿はお衆の二階からよく見えた。大抵はびつしやり締つてゐる二階の白い障子に雨が終日斜に降りかゝつた。

『お上さんよく降るわねえ。』

こんなことを言ひながら、紺蛇の目の傘を傾けて、お衆は土手の方へ買物に行つた。

色々な買物をすませて、土手を下りようとする、丁度向うから幌をかけた車が一臺やつて來た。摩れ違ひながら、ちよつと覗き込んだお衆は、

『あ、貴方?』

と思はず聲を立てた。

それは久しくやつて來ない富田であつた。『路がわるいのよ。車が通るかしら?』かうお衆は言つたが、



『何あに大丈夫だらう。』といふ聲が中でして、車は静かに土手から向うへと下りて行つた。

深い泥濘の中を縫ふやうにして辿つて行く車の影は、夕暮の薄暗い暗闇の中にや、暫く見えてゐるが、お糸はそれを前にして急いで歩いた。雨はまた盛んに降り出して來てゐた。

辛うじて家に辿り着いた時には、富田はもう二階に上つて、明るい電燈の下に莞爾した顔を見せてゐた。

『えらい路だね、あんなちやないと思つた。』かう富田は言つて、『今時分何處へ行つたんだえ？』

『ちよつと買物に……』

『すつかり濡れたちやないか。』

『だつて、ひどい降りなんですもの。』お糸はかう言つてちよつと笑つて見せたが、着物を着替へながら、

『何うしたんですの？ 此頃は？ 少しも來て下さらないのね。……』

『少し忙しかつたもんだから。』

『土地ちや、此間から水が出る水が出るといふ評判ばかりよ。今でもあの通り、溝なんかですつかり閉いて了つてゐるんだから、本當にその時は何うしやうかと思つて、心細いつたらないのよ。』

『大丈夫だよ。』

『でもわからないわ。出れば一晩の中に水をかぶつて了ふんだつて言ふから。』

『もう天氣になるよ。』

『なら好いけど……』かう言つて、長火鉢の向うに坐つて、鐵瓶を下して、火箸で火をあらけて見て、

『すつかり消えちやつた。』

お糸も嬉しさうに莞爾してゐた。一人である時には、女心のさびしさに、ついいろいろなことを思ふけれど、かうして男に向つてゐると、さういふことは何も彼も忘れて了つてゐるのであつた。歌子の話もこの夜は二人の口の上になかつた。

お糸は下の上さんに頼んで、鰻などを取つて貰つた。お糸は貸本屋の亭主の話などをして、『だから、其時は來て貰ふやうに頼んで置くのよ。』

『大丈夫だよ、僕だつて來るよ。』

『でも本當にひとりであると心細いわ。力になつて呉れる人は誰もゐないんですもの。』

樂しげに笑ふ聲は久し振て二階から洩れて聞えた。つゞいて三味線の音などもした。二階の間はその夜は遅くまで明るく雨の降り頻る中に見えてゐた。



その後は雨が猶つゞいて降つた。水が出るといふほどではないが、土手の此方は大方泥濘の深い路になつて了つた。川には黄い佗しい水が漲りわたつて見えた。

何うかすると蔽ひかさなつた雲の中から日影が一時ぱつとさすことなどもあつた。お糸はさびしく二階で三味線などを弾いた。

歌子に對する噂をお糸は時々耳にした。富田は矢張其處に行くらしかつた。男の心といふことがお糸にはわかりかねた。頼りになるやうで頼りにならないやうな心持がしてゐた。頼りにして好いのか、頼りにしても爲方がないのか、それもちよつとお糸にはわからなかつた。『そんなもんですよ、一緒になれば皆な思つたやうにならないものですよ。』かう貸本屋の細君は言つた。

もつと落附いた心持でゐるとは思ふが、今の境遇では、何うしてもちよつとしてはゐられなかつた。何時かういふ生活が破れて、新しい困難が其の前に迫つて來るか知れなかつた。窓に凭りかゝつて、お糸は降り頼る雨を見てゐた。

工場の汽笛の音が川に鳴りひゞいて聞えた。大きな鼠色をした帆が樹と樹の間から見えた。女工と男工とが夜おそく戯談を言ひながら窓の下を通つて行く氣勢がした。

『もう大丈夫ですよ。水が出るやうなことはありませんよ。』かう貸本屋の亭主が言つた時には、雨が晴れて、土手下の黄ばんだ溝に日がわびしくさしてゐた、番傘などが干してあつた。

『でもかうして一人してゐると、さびしう御座んすよ。矢張忙しけりや、思ひ出す暇もないやうなもんですからね。』こんなことをお糸は言つた。

お糸は早くから戸を締めて、毎夜土手の方に遊びに出かけた。師匠の家で花牌を引いてゐることもあれば貸本屋の家で夜遅くまで話してゐることもあつた。雨のやんだ後には、月が明るく河水を照らした。



毘  
外  
二  
編



## 畏

一

何處の家にも醜悪なるものが必ず一つある。それは寢室だ。

モウパッサンの作にもThe Bedといふのがあつて、人生とベッドとの關係がいろ／＼な風に書いてあつたのを覚えて居る。

人間はベッドで生れてベッドで死ぬといふことが書いてあつた。

家庭改良論者も寢室に就いて一考することがあるだらうが、一體何んな風に考へて居るかそれを聴き度いと思ふ。さう言つたら其人達は『戯談を言つては困る。』など、笑ふかも知れない。が決して戯談ではない、笑ひ事ではない。

僕は此間それをある友人に話した。するとその友人は變な眼色をして僕の顔を見て——丁度それは僕が何うかしたのぢやないかと怪しむやうな風で、『困るねえ、そんな風に考へては………體が少し何うか



してるんぢやないか。少し醫師にでもかゝつて見て貰つたら何うだ。』と言つてまた僕の顔を見た。

『だつて仕方がないさ、僕はさう感ずるんだから。』

かう言つて僕はいろ／＼なことを饒舌つた。一體本能といふ奴が癩に觸るといふことから始めて、それに服従して平氣で居る人間や、それと妥協して表面で綺麗なことを言つて裏面で汚い業をして居る輩や、わざとすまして悟つたやうな顔をしてゐる意氣地のない人達のことなどを話した。

『結婚の式に床盃といふことがあるが、あれは親が子女の性慾の一種の保證と言ふやうなものだ。あれ位不思議な醜惡な不自然なものはない。』

こんなことを言つた。

けれど寢室がなければ人生もないのだ。寢室を撲滅すれば家庭も撲滅しなければならぬのだ。情ないが仕方がない。

しかし醜惡なるものは矢張醜惡に眼にも映れば心にも映る。單に仕方がないで済ましては居られない。そこで矛盾が起つたり衝突が起つたり動搖が始まつたりする。

夫の床が敷かれる。妻の床が敷かれる。子供の床が敷かれる。

これで六疊の間が一杯になる。赤兒でも居ればそれこそみじめだ。何のことはない悲慘なる人生の縮

圖だ

けれど一體夫妻の關係からして既にさう出來てゐるんだ。

『妾はあの人でなくては厭！』

『戀しき戀しきわが天使！』

始めはこんなことをお互ひに言ひ合つて美しい夢を見てゐる。その爲めには世間の義理どころか、十餘年來養育して貰つた親をも弊履のごとく捨て、顧みない。その癖、男も女もある満足を得さへすれば、それでもうさめ心地になるのはちやんとときまつてゐる。少し注意して居さへすれば、何日の何時にかれ等は其の慾の満足を得たかといふことが歴然として解る位である。

『あんな女を戀人にしたのかなア。』と言つた風な言葉を屹度男は其時に利くものである。

そして其時から男女の間の悲慘なる關係が續く。離れた心を合せやうとする努力、弱點を押へて平和な美しい家庭をつくらうとする努力、昔の美しい夢を再びくり返さうとする努力——それが皆な空しい努力だ。

けれどこの努力が空しい努力であるといふことが、却つて生殖とか本能とかいふもの、目的には適つて居るのだ。

僕も妻を持つた二三年は、これでも随分努力を遣つたものだ。愛情を繋ぐ爲めに心にもない御世辭を言つて見たり、錢も無いのに帶の一筋も買つて遣つたり、縁日に連れて行つて寄席の御つきあひをした



り、食ひたくもないお汁粉を一緒に食べたり、時には社からの歸りに菓子屋に寄つて妻の好きな餅菓子を買つて来て遣つたりしたものだ。それに初めての兒が生れた時には、一廉お父さんになつた氣で、此兒が生長おほきくなつたら何うしやうの、海老茶の袴を穿かせてリボンをさせて天晴小さな女學生に仕立て、一緒に伴れて歩いたらさぞ好からうの何のとつまらぬ空想に耽つたものだ。それが何うだ。今では、其娘の兒が十歳になるが、その空想の一端でも實行が出来たことか、無類のわからずやのわるあがきをする悪戯ものになつて、女でありながら、男の兒を酷めて泣かせたり、お錢ちやうをねだつて外で立食を遣やらしたり、それは見られた態ではないといふ始末だ。

妻だつて矢張其通りだ。子供を産んでから、状態はすっかり變つて了つた。お互ひに空想のある中には努力もすれば反省もする。時には恥かしいなど、いふ若々しい顔色も見せることがあるが、兒を産んで、これで一家の主婦といふ地位が定ると、すつかりその様子が變つて、我儘といふ地金がドシ／＼出て來る。つまり女は兒を産んで初めて現實に觸れて來るのだ。

その現實に觸れる状態が女のは一層烈しいやうに考へられる。今まで矯めて押へて居ただけそれだけその反動が強く來るといふ譯なのかも知れない。

社會と自分との關係、自分と夫との關係、自分と兒との關係、それが意識されな<sup>よつかり</sup>いまでも分明と解つて來る。肉慾の上にも覺めて來る。

けれど總て『覺める』とか『自覺する』とか言ふ形は、本能の上から言つて餘り好ましいことではないと見える。『全く覺める』といふことが生存上出來ないのを見ても、その間の消息は略々解る。覺めな<sup>い</sup>中には、精神がそれを助けるが、覺めて來ると今度は肉體がそれを助ける。

子が生れると、夫妻の關係は益々肉體的になる。

肉體と肉體——自我と自我、其處に猛烈な悲慘な蠶食状態が始まる。

子が生れると、夫に對する妻の愛情が薄らいでそれに集る。夫などは何うでも好いといふ形になる。

尤も女に言はせると、さうぢやないさうだ。子を育てるのに忙しいから、ついさういふ風になつて行くのださうだ。然し、證據がチャンとあるから駄目だ。第一、乳といふものがある。これはまだ兒が世の中に出不い中から、十箇月といふもの既に完全な哺乳作用をつゞけて居る。

女には兒が腹に居る中から、『自分の兒』といふ愛情が知らず識らずの間に成り立つて居る。兒は男のものではなくて女のものであるといふ運命は、その最初から明かにきまつて居る。

第二に、其兒のまことの父親は誰であるかといふことは女より他に知るものがない。男に取つては、随分大きな苦痛にもなり煩悶にもなる秘密の鍵をちやんと女に握られて居る。

見給へ、母親が其幼い兒を膝に抱いて、暖かい白い頬を胸に當て、張つて來た乳房を含ませてるさまの心地よささうなうれしさうな状態を。男が保留された本能作用を自由に家庭以外に縦にするのも



止むを得ないぢやないか。

## 二

平凡と單調！

實に平凡だ、單調だ。世の中に何がある。何んな色彩がある。何んな興味がある。飢渴と飽滿、不平と得意、それが本能の力に翻弄されて、人生の表面にさゝ波を立て、居るばかりだ。

今日、軍人の弟から久し振で便があつた。

——田舎にかくれて、新兵共の相手をして、練兵場の埃に眞黒になつて暮し居り候。

こんなことが書いてあつた。それを妻が見て、『旨いことを言つて居なさる。もう澤山貯金が出来たてせう。』など、言つた。練兵場の埃に汗みどろになつて、號令をかけて一生を暮す軍人も軍人だが、かうした手紙を見てさへ、すぐ金のことを思ひ出す女も女だ。

黙つてふいと立つた。

長火鉢のさし向ひもつまらないし、子供をからかつて見たところでおあづけをしたりチン／＼をしたりする犬以上の面白味は得られない。仕方なく座敷に入つて見る。床には依然として布袋の幅が懸つて居て、違ひ棚には鉢の蘇鐵の葉が埃に塗れて白くなつて居る。長押の油繪、水彩畫、何れもこれも皆な

同じ見飽きたものばかりで、眼に映るが早いか、頭腦はすぐそれを反撥して了ふ。

『こんなものは無い方が好い。いつそ外して物置にでも藏つて了はうか。』

かう思ふが、しかしそれを實行するほどの熱心もない。縁側にある籐椅子に横になつて見詰めて居ると、不思議にもそれが皆な壁と同じものになつて了ふ——壁以上の感覺は起らなくなつて了ふ。そしてその灰色の壁が空の灰色と無窮に續いて居るかのやうに思はれて来る。自分の心も頭も矢張それと續いてゐる。

頭を右に打付けて了ひたいやうな不思議なイラ／＼する氣になつた。

籐椅子にも安んじて横はつて居られない。

書齋に入らうとしたが、何だか其處に入るのも厭な氣がする。其處にはイブセンやツルゲネエフやモウパッサンの幽靈が居るやうに思はれる。空の上を飛んでホンチニの沼の臭氣を嗅いだ話や、椅子や家具がグ／＼鳴つて空を飛んだ話などが思出される。それに、本箱ほんばこの中の本が、いつも同じなのが癩に觸つた。イブセンの隣には屹度ダヌンチオがある。ゾラと並んで屹度ドオデエが居る。それが大抵は讀んで知つて居る。何んなことが書いてあるかといふことがすぐ思ひ浮べられる。かれ等か一生かゝつて、小さい眼で世の中を見て、かうして遠い東洋の日本の果ての書齋の中にまで『生きた墓』を築いて居るかと思ふと、情けなくなる。唯の墓でさへ厭だ。青山の共同墓地の割棟長屋を見ると、ゾツとす



る。それなのに、其の無限の『生きた墓の割棟長屋』を狭い本箱の中につくられるのは、やり切れないことだと思つた。

死んだら、遺言をして葬式などはせずに焼場に持つて行つて骨にして、それをこつそり何處かに埋めて貰ひたい。石碑などは忘れても建て、貰ひたくない。すぐ忘れて貰ひ度い。

いつか庭に下りて居た。

梧桐あせぢに山吹に芭蕉に沈丁花に椿に櫻——表庭に廻ると、扇骨子かばなめに糸檜いとのはに楓に寒山竹に高野槇にひよろ松——いつも同じだ。

敷石の数も矢張十八しかない。

それがまた癩に觸つた。何故いつも同じである！ 何故いつも同じである！ 何故いつも同じである！

長火鉢の傍でせつせと裁縫をしてゐる妻に、

『いつも同じ顔をして居るなア。』

と言つて見た。妻は笑つて、

『また始まりましたね。』

『だつてさうだもの、お前の蒼い汚點しみのある顔と、餓鬼共の涎を垂らした顔と、お金(下婢)の肥つた

横に廣い顔と……あゝあゝもう倦うきた！』

『變つた顔を少し見ていらつしやい。』

それには頓着せず、

『よく世の中の人は倦うまないなア。同じ顔を毎日々々見て、同じことを毎日々々言つて、三度の食事  
も大抵型に倣つたものを食つて、よくそれで生きて居られるなア。』

かう言ふと、

『だつて、それは無理ですもの、誰れだつて皆なさうして生きて居るんですもの。』

『ぢやお前などは、さういふ感じは起らんかねえ？』

『起したつて仕方がないぢやありませんか。』

『仕方がないだけで、起さないうで居られるんだね。』

『え、さうですとも。』

明瞭なる答である。かういふ明瞭なる答を爲し得られる人は幸福だ。畏の中に入つて居ても畏と知らずにはまつて行く人間が羨ましい。

本能萬歳！



屋敷町――

垣と門とで家々が出来て居る。其間を大きな通りや小さな路が縦横について居る。朝に夕に豆腐屋のラツパの聲が聞える。流行のパンパンも聞える。

大小の別はあつても、門に立關に居間に座敷に書齋に臺所に厠。座敷には額や幅物が屹度懸つて居る。居間には屹度箆笥や服箆笥が置いてある。長火鉢も置いてある。其前には夫と妻とが坐つて、茶を飲んだり菓子を食べたりする。時には感情の衝突などをすることもある。

貸家を建てる時、大家は、

『此の間と此間とは通れるやうにして置かなければ不自由だ。客が來ると第一困る。それに臺所と茶の間とを今少し接近させなければ具合が悪い。それに何處の家にも老人といふものが居るものだ。一つ離れた間をこしらへて置かなければいけない。』

こんなことを言つて、成だけ便利の好い借手の早くつきさうな家を建てる。

盜賊はまた物を盗む目的で、この家庭といふものを研究して居る。新築の家があると、夜、こつそりと、その構造を見て歩く。

人間の種類から言へば、夫に妻に子に老人に下婢、室の構造から言へば、前にも言つた座敷に居間に勝手、ちやんと人間の家庭の型が出来上つて居て、其時間々々には、何處の家でも皆な同じやうなことをして居る。

かう考へて來ると、寢室と人生とがまた思ひ出されずには居られない。

僕は家屋の中から庭に通れる。庭から門外に通れる。門外から野に通れる。

野も矢張穹窿の型に倣つて居る。

泣いたつて叫んだつて駄目だ。

四

毎日通ふ路に若夫婦の肴屋が住んで居た。

此家屋は四軒長屋で、向うの隅がその肴屋の若夫婦、其隣が西洋洗濯、其隣が鶏を飼つて、『生み立たまごあり』など、いふ看板を出して居る。

此處は二三年前まで田だつた。今、鬚の立派な軍人や、ハイカラな洋服を着けた會社員や、董色の袴に靴を穿いた女學生などの通る大通りは、田と田の間の細い畦道であつた。小川に架けた橋も丸太を二本並べたきりて、夜など危なくつて通れなかつた。それが段々開けて來た。高臺が屋敷町になるにつれて向うの



高臺の屋敷町との連絡上からその低い田が埋立てられて貸地になり、やがて縄が張られて貸家が建つた。其貸家は久しく空いて居た。

人間の移住して来る状態は、餌のある處に集つて来る蟲や鳥と同じことだ。高臺が開けなければ其田は埋め立られない。屋敷町が開けなければ其長屋は建てられない。魚類の必要があつて始めて其處に舎屋が移つて來た。

始めは氣にも留らなかつた。

『これでも肴屋かな、けちな肴屋もあつたもんだ。』

こんなことを思つたきりだ。

處がある日其上さんが綺麗に丸髻に結つて居たのを見た。赤い手絡が秋の晴れた日の空氣に際立つて鮮かに見えた。年は十九か二十位であつた。

『あれでも初めて世の中に出て、立派にならうと思つて、一生懸命に働いて居るんだ。前途に色々な苦痛があるのも知らないで、春のやうな希望を抱いて遣つてるんだ。本能に騙されて居る中が羨しい。』かう思つてから、段々其若夫婦の生活に眼をつけるやうになつた。

時には亭主（と言つても二十四位）が一生懸命に板の間を洗つて居ることもあれば、細君一人で洗濯をして居ることもある。初めは小さい半ぎりを簡單に肩に載せて、見すばらしい風をして肴を賣つて歩

いたものだが、段々得意先が出來て、其中には金廻りもよくなつたと見えて、やがて新しい商賣道具を新調して、天秤で威勢よく得意廻りをしてゐるのを見懸けるやうになつた。

六疊の一間に箆筒も見えた。

松魚の刺身をつくつて居ることなどもあつた。

矮鶏を二羽飼つた。

それに餌を撒いて居る赤い手絡の丸髻を非常によく似合ふと思つたこともあつた。

雨の後の朝日には、蛇の目傘と番傘とが干してあつた。

亭主は板きれを前の普請場に居た大工から貰つて、それを箱庭にして、其處に築山やら池やら橋やらをこしらへて、楽しんで居る。陶器せとものの小さい燈籠なども買つて來て其處に置いた。仕事を早く仕舞つた時には、餘念なくそれに水をやつたり何かして居るのを常に見懸けた。

亭主の留守に近所の若者が聲をかけて話して居ることもある。

上さんが髪を亂していつにも似ず蒼い顔をして居ると、

『餘りたしなみがわるいから、さういふ眼に逢ふんだ！』

と聲を立て、笑つた。

氣を附けて見ると、若い上さんは初めのやうな元氣がなくなつて、常に蒼い顔をして居た。それに引



かへて、亭主は岩乗な體格をして、肥つた脛を露はにせつせと働いて居た。

本能作用は此處にも完全に其力を發展して居るのを僕は見た。

僕は不愉快を感じた。

亭主は朝早く河岸に買出にかけける。それを送り出して、上さんは今一寢入遣ると見える。何うかすると、日がカン／＼照つても雨戸も明けずに居ることがある。一度などは、亭主が魚をかついで歸つて來ても、まだ寢て居るので、お宮——とか何とか言つて戸を叩いて居るのを見たことがあつた。

一月ばかりは、上さんは蒼い顔をして寝たり起きたりして居た。汚い蒲團から髪を蓬々とさせた女の頭が見えて居た。

やがて子供が生れた。

此頃では風車が天井から吊つてあつて、下に赤い小さい枕と月代の生えた兒の頭が見える。

騙されて、艮に入れられて、子供を一人育てなければならぬはめに入つたのも知らずに、やれお七夜だ、やれお頭つきだ、やれ赤飯だと騒いで居る人間の愚かさ加減が解らない。

## 五

子がまたあれで中々親をたらすことが上手だ。

生れ落ちるとから、ちゃんと生存に必要な力を持つて來る。滑かな暖かい肉や、柔かに乳を吸ふ力や些やかな可憐さうな泣聲や、是等が總て母親の同情を動かすやうに出來て居る。一刻も止む時のない不斷の要求をも甘んじて満たして遣らうといふ氣を母親に起させる。

三十日も經つと、もう母親をちゃんと見覺えて居て、其後姿を見送つたり何かする。間もなく笑つて見せたり何かする。

『可愛い子！』

母親はその柔かい頬に接吻する。

世間の人はこれを名づけて愛情といふ。神聖なる愛ともいふ。愛情の銚など、いふ字も出來て居る。實際さうだらうか、實際愛情の銚だらうか、生存の必要の爲に生じた利己の自家防衛ではないだらうか。當然の自家防衛！

『かアちゃん。』

『とウちゃん。』

これは男が女の肉體を得るまで『わが愛する君』とか『わが命を支配する君』とかいろいろ上手なことを言つて女をたらすのと同じことだ。目的は女を得るにあると同じやうに、子も矢張獨立生存の出來るまで哺育して貰ふ爲めの必要のお世辭である。



弱い獨立の出来ないものには、その程度に従つて、やさしいとか可愛らしいとかいふ人の同情をひくものが附いて居る。

此處に二人の女がある。一人は意志が強く肉體も完全に發達してゐる。一人は感情ばかりで、意志が弱く、肉體も弱い。さういふ時には大抵は一人は人に可愛がられ、一人は人に憎まれるものである。

しかし——さういふことが明かに解つて居て、神聖なる愛情でも何でも無いといふことが明かに解つて居て、それで猶其力に支配されるといふことが心外だ。

心外だが致方がない。

一人前になつてから子は親に向つて何んなことを言ふと思ふ。

『自分は親の爲めに生きて居るんぢやない。自分は自分だけの満足を買はなけりやならない。』  
てなければ、

『何も、親に自由にされる義務はない。親には子を養ふ責任がある。』  
など、いふ。

親となり子となつたのが既に悲慘である。夫となり妻となつたのが既に悲慘である。生れながらにして、夫妻親子となるべき良に陥れられて居るのが第一の悲劇である。  
金縛りといふことがあるが、それよりも一層辛いのは肉縛りである。

肉縛り！

考へて見給へ、此位情ないことがあるか。肉縛りにされなければ生きて居られない世の中である。争鬭と煩悶と苦痛と矛盾とそれが一生涯續くのだ。

平凡と單調との中にこの肉縛り！

ある友人は言つた。

『そんなにつまらない家庭なら、ドシ／＼破壊したら好いぢやないか。そんなにつまらない世の中ならドシ／＼辭職をした方が好いぢやないか。』

破壊したり辭職したりすることが出来るやうな簡単な繩や良なら、何にもさうヤキモキすることはないのだ。破壊せられざる辭職せられざる肉の繩でくゝられて居るから辛いのだ。

『ぢやそれに服従するさ、悟りなり何なり開くさ。また必要なら眼も閉いでしまふさ。』  
かう言つて平氣で居る。

平氣で居られる。

六

電車も倦きた。

良



同じ道を通つて、同じ町を曲つて、同じ社に出勤する。社に同じ顔ばかりで、毎日々々同じことを繰り返し巻き返し遣つて居る。風が吹くと木の葉が動くやうに、この人間も矢張ある力にあやつられて動いてゐる。

路の角にサハノツルと書いた看板がある。是れは言ふまでもなく酒の看板である。その看板は毎日毎日二度づゝ僕の眼に映る。午後にはいつも夕日がまともに眩しいほど射してゐる。

それが何の反應をも呈さない。

鼻缺けの小使が毎朝バケツを階段の中ほどに置いて、雑巾を水に浸して、いかにも倦きたといふ風でだらしなく其處等を拭いてゐる。

矢張何等の反應もない。

室の中央に勤惰計タイムレジスターがあつて、自分の番號を推すとカンと鳴る。そしてそれが巻きつけた細長い紙に出勤時刻を青く捺した。しかし矢張何等の反應もない。

反應がないのが辛い。淋しいのが辛い。人間と人間と、飽まで没交渉で、何を言つた處で、何を争つた處で、要するにそれは木の葉が風にさわぐやうなもので、何うにもならない。泥酔よつきらひ同士が互ひに寄り集つて、お互ひに解りもしないことを聲高く罵り合つて居るのと同じだ。

表面は賑かな活動の人生——しかも底は唯だ寂寞！

Indifference of Nature.

寂寞なる人生に本能の跳梁——没交渉の人間の離れ難い肉の束縛。

本能の無限の跳梁は人生の底に横れる寂寞を得て、益々其力を逞うする。

本能から起る快樂に由つて人はその寂寞を忘れやうとする。しかしそれは一步々々深い係蹄わなの中に陥れられて行くのであるのを知るものはない。

.....

ある日、社から歸つて來ると、姉が來て居た。

此姉には四年ほど逢つたことがない。

四年前に、此姉は僕の家から斷りなしに亭主の家に逃げて戻つた。『もう決して二度と歸らない。』と愛想をつかして出て來た亭主の家へ歸つて行つた。

それが出るの入ると苦情を言ひ始めてから五度目であつた。

姉には子供が三人あつた。五人あつたのだが、二人はその貧しい夫婦喧嘩の中で死んだのだ。

其總領の娘の子が十五になつて肺病で死んだ時のことを僕は覚えてゐる。淺草の汚い場末の棟割長屋からその葬式は出た。秋の日の午後の黄ばんだ光線を受けて、長屋や寺や小工場の煙突や埋立てた田圃などの續いた間を花も導師もない棺が通つた。



烟筒からは煙が出て居た。

時々尖つたやうな汽笛が鳴つた。

僧侶は碌々お經を讀まなかつた。椿の葉の暗く繁つた蔭に穴が掘つてあつて、それに小さな四角の棺を投り込んで土を掛けた。姉も亭主も泣いた。

死んだ兄が其時、

『父さんや母さんに仲直りをさせやうと思つて、死んだのだ。お前が心配して死んだのに、父さんも母さんも、今日から了簡れうけんを入れ替へて、もう決して子供に心配をかけるやうなことはしないさうだから……』

言ひかけて聲は曇つた。此の娘の三歳の時から、姉はあんな薄情な亭主には添つて居られないと言つて喧嘩しては里に歸つて來た。此の娘は父と母と喧嘩するのを見て常に心を痛めて居た。姉が逃げて來てると、

『お母さんは來てますか。』

と、まだ十歳位の幼い娘が跡を慕つて遣つて來た。

『お前、子供を泣かせるのが可哀相なら、子供の爲に、身はないものと思つて、働いたら好いちやないか。』

母はいつも姉にさう言つた。

『子供の爲め——』

かう言つては、姉は幾度となく仲直りをして歸つた。

しかしそれは單に子供の爲めでなかつたことは言ふまでもない。喧嘩しても矢張亭主が時々戀しくなつた。

『貞まこと(姉の名)の夫婦喧嘩は、くせ見たいなものだよ。懷妊みんちになりさへすると、屹度出るので入ると言つて大騒おどろぎを始めるのだよ。』

後には母も呆れてかう言ふやうになつた。

成程喧嘩をする時には屹度みち身重になつて居た。その度毎に一人づゝ子供が産れた。次が産れる頃には一番下のが屹度乳離れをする位になつて居る。子供等は一人々々皆な母の跡を慕つて里の家に遣つて來るやうな眼に逢つた。

『貞にも困るよ。』

と言つた母も死んだ。

『本當かと思つて、一生懸命になつてると、すぐまた亭主心がついて、歸つて行つて了んだから馬鹿馬鹿しい。もう相手には決してなれない。一生懸命になつてわざとかがれるやうなものだからな。』



かう言つて怒つた兄も死んだ。

この姉の一生を考へると、随分いろ／＼なことが眼に浮んで来る。悲惨なる夫妻蠶食のさまが歴々と見える。

十月の初め頃、山手の屋敷町の寺の門前に髻の蓬々と生えた三十七八の職人風の男が三歳位の女の兒を伴れて立つて居た。

『お母が居ない——』と子供は泣いて爲方がなかつた。細い秋雨は蕭々と降つて居た。屋敷の庭からは木犀のほひがした。

『母さん、もうこれから決してこんな不都合はしないから、今度だけと思つて了簡して、貞を返して下さい。』

母が行くと手を合はさぬばかりにして、其男は頼んだ。

『丸で芝居のやうだつた。』

と母は其時言つた。

姉の遁げて來た跡を追つて、其亭主が里の家の周圍をつけねらつたのも一度や二度ではなかつた。家の周圍には畠があつて玉蜀黍がガサガサと風に靡いた。朝早く顔洗ひに井戸端に行つた兄が、前の普請場に其の見すばらしい風をした弟婿が後向になつて寢て居るのを發見したこともあつた。夕日のさし渡

つた兄の書齋には其頃頼まれて仲裁に入つた男が幾人となく出たり入つたりした。

後には兄は頑として強硬の態度を取つた。『とても一緒に添はせて置いたツて駄目だ、斷乎として其間を裂く方が雙方の幸福だ。子供は子供で何うにでもなる。』かういふ決心をした兄は容易に其仲裁に應ずるやうな氣色を見せなかつた。

『始めて中に入つて下すつた方には、私の言分が非常に不人情のやうに聞えませうけれど、とても一緒に置いて置いても駄目なんですから。』

かう言つて拒絶した。

それにも拘はらず、姉は矢張逃げた。それは日が暮れてからであつた。鳥渡の間に姉の姿が見えない。四邊をさがして見ても矢張見えない。下婢は、『さう思へばお姉さんは風呂敷をかゝへて、裏からこつそり出て行つた。』といふ。

『馬鹿な奴だ!』

と兄は言つた。

『あゝして一生を暮すんだ。』

と母もしみ／＼言つた。



今日其姉が来て居る。

汚いみすぼらしい風をして居る。

『何うしたねえ？』

姉は低頭して居る。年は四十二、髪は半ば白くなつて居た。

矢張喧嘩をして出て来たといふ。四十二になつて矢張同じやうな喧嘩？

僕は言つた。

『一體何うしたんだ。不真面目極まるぢやないか。四十二にもなつて、夫婦喧嘩をして居るものが何處にある。世の中といふものを真面目に考へて見ないから悪いんだ。喧嘩をしてつまらないとか、馬鹿馬鹿しいとか、世間體が悪いとか、さういふことを考へさうなものぢやないか。』

又次のやうなことを言つた。

『お互ひに喧嘩を面白くぐで遣つてゐるんぢやないか。喧嘩はつまらないが、喧嘩から仲直りをする時の心持は格別好いもんださうだ。』

七

『三十八九になると、男はそんな風になるんですね。』かう妻が言つた。

『やうさ——』

『女は何うしたら好いでせう。』

『何うしたらつて——子供さへ育て、居たら好いのさ。』

『だつて、子供にも厭々した。』

『うそを言へ。』

『うそなものですか。毎日子供と喧嘩ばかりしてゐるぢやありませんか。』

『それがうその證據だ。喧嘩でもする相手があるから女はまだ幸福だ——。』

『まア、あんなことを……』

と妻は淋しく笑つて、『男といふものは勝手なものですねえ。』

『勝手はお互ひさ。……兎に角女は子供があるから幸福だ。亭主の家に居る時だけ、神妙に小さくなつてゐるが、亭主が出かけた跡では、子供を相手にぼた餅でも拵へて、暢氣に遊んで居るぢやないか。何しろ子供と笑つたり泣いたりして暮らして居るのを見ると憎くなるよ。』

『ぢや、貴郎もさうして子供と遊べば好いちやありませんか。』

『暢氣なことを言つてる。己は女ぢやない。』

『だつて、子煩悩な男の人世の中には随分あるぢやありませんか。縁日に奥さんと一緒に子供をつ



れて出かける男の人はいくらもあるぢやありませんか。』

『己にはそんなことはちつとも面白くないから駄目だ。……人が持つてるものに手を出して見たつて爲方がない。』

『人が持つてるものとは？』

『お前の持つてる子供と言ふことだ。』

『また、あんな事を言ふ……ぢや、子供を貴郎が育てれば好い。』

『育てられないから言ふんだ。子供は女でなくつては育てられないやうに出来て居るから情けないんだ。』

『それぢや、男は一家の主のやうに、妻に對しても子に對しても立派に嚴かに男らしくして居れば好い。』

『立派に、嚴かに男らしくとは、何ういふことだ。』

『……』

『働いて、金を澤山取つて、後の萬一のことを考へて、亭主が死んでも、樂に暮して行けるやうにして置いて遣れば、それで好いんだらう。』

『また始まつた。』

『また始つたぢやない、眞面目に言ふのだ。夫婦といふものは四十二になつてもお互ひに喧嘩しなければならぬやうな間柄に出来てるんだ。……厭だ！、厭だ！』

互ひに黙つた。暫くして、

『ぢや、何うすれば好いんです？』

『厭だ！ 厭だ！』

と打附けたやうに言つた。

『お前は此間亭主孝行だつて言はれたね。』

と言つて言葉を繼いで、

『亭主孝行！ 旨いことを言つたもんだ。お前は何處かさう出来てるよ。さういふ風に見えるやうに出来てる。何處か從順なところがあるんだ。貞節らしい處があるんだ。』

『何も私が亭主孝行と言はれたつて、喜んで居る譯ぢや有りません。』

『誰も喜んで居ると言ひはせんよ。さういふ風にお目出度く出来ると言ふだけだよ。』

『たんと仰しやい、……たんとお酷めなさい！』

『厭だ！ 厭だ！』

と立上つた。



かうした話はいつものした。

時には真面目な顔で、『その中、樂にして遣るサ。子供とお前と食ふだけの財産のある樂後家にしてやるサ。後家といふものは羨しさうなものだ、』など、言ふこともあつた。妻は又妻で、『死んだら、妾の保險が二百圓あるから、好きな女を貰ふ結婚の費用になさい。』  
こんなことも言つた。

八

夥しく酔つて居た。

ランプも黄ろく見えた。人の顔も黄く見えた。頭腦がぐらくした。外には雨がザン／＼降つて居る。

疑惑が盛に起つた。征服者だか敗北者だか解らなかつた。

傘がないので、びしよぬれにぬれた。路は暗い暗い林の中を通つて居る。此處を少し行くと、蘆荻の茂つた泥深い沼があつたのを覺えて居る。雨滴あまたれの大きいのが頭の上に落ちるので氣がついて見ると、帽子を被つて居なかつた。帽子は床の間に置いた。床の間には萩と桔梗とが生けられてあつた。その鮮かな色が雨の降頻る暗い闇の中にはつきりと浮んだ。

『寺——さうだ、寺より外に逃れる處がない。』

雨と泥濘の中をびしよ濡れにぬれながら歩いて來た。

九

夜だ。

汚い泥沼に面した茶席が、つた小さな間で酒を飲んで居た。

榮えの後の衰へ、酔ひの後の醒めと言つたやうな厭な氣が四邊に充ち渡つた。闇の上に闇が蔽ひかぶさつて、何處が路だか何處が森だか解らない。

『其處は水ですか。』

と誰かがうつろのやうな聲で言つた。

マッチを抛つて見た。幾度投つて見ても途中で消えた。闇は矢張闇だ。池だか水だか解らない。池だと知つて居ても矢張さうでないやうな氣がした。

闇の中に一とこぼつと明るいとこがあつた。よく見るとその灯はランプでも瓦灯でも電氣でもなく、裸蠟燭だ。燭臺に一本ほつねんとして立つて居た。その影がチラ／＼した。それで、『成程其處は水に移つてゐるんだな。』といふことが飲込めた。



其灯で室の中が見透かされた。其處には誰も居なかつた。箆筒のやうなものと鏡臺のやうなものと簀戸のやうなものが朧ろげに眼に映つた。

蠟燭の火がいやに赤く黄い。この世ではないやうだ。周圍には誰も居なかつた。茶湯臺にビールが二本明けられてあつた。井には大根のあさ漬が二切入れられてあつた。

泥沼の臭ひが時々鼻を衝いた。夏の暑い日に腐つた臭ひだ。風は全く絶えて、ムツとした暑さが汗を誘つた。

家に添つた路が一二間ばかり微かに見える。軒の梧桐の葉が青く灯に照らされて居る。この路を時々白地を着た人達が闇から來て闇へ出て行つた。大抵二人連であつた。艶かしいそゝるやうな聲も交つて聞えた。ハアモニカを吹いて行く青年の後には庇髪に結つた肩揚のある娘が跟いた。

酒を飲んで居る人々の顔は蒼白かつた。肉の疲れ、心の疲れ、神経のつかれは歴々と見えた。

『本當に水だらうか。』

かう思つて、またマツチをすつて抛つて見た。矢張途中で消えた。

裸蠟燭がチラ／＼する。

其時本能の話をしたことを思ひ出す。

處女が始めて肉慾を知つた時に、悲しくなつて泣いたとある本の中に書いてあつたが、今の女には泣

くやうなものはありません。

けれど泣かざるを得ないではないか。苟くも一度歡樂を縦まゝにした上は、それが一生涯附いて廻るのだもの、歡樂の報酬は必ず來るのだもの、一度で済まして置くなどといふことは出來ないのだもの。が勝利者であるか女が勝利者であるか何方だか解らないのだもの……。

男離れたくたつて離れられない。

後の不愉快——それは矢張飽食の不愉快と同じだ。その不愉快の状態は丁度泥沼の汚ないのに似て居る。それで居て、それがある期間を通過すれば、其力は更に前と同じやうな鮮かさと生々しさを以て迫つて來る。

其力！

その力から此世界が生れて居るのだ。その力から此の人間が出來て居るのだ。その力からこの悲痛悲惨な状態が生々とした色を着けて居るのだ。呪つて好いのか、崇拜して好いのか、平氣でそれに服従してゐれば好いのか、分らない。

男が逃げようとする女が追ひかける。女が逃げようとする男が追ひかける。『もう、どうせ外に嫁に行くことは出來ない體だ』『肉體も精神も皆な己の所有物だ』『親だつてもう何うすることも出來ない』



女の親と男との本能争ひが起ると、親はいつも敗北する。敗北するやうに出来ると言つて好い。力と力との争闘――

結んで解けない争闘、第三者が解かうとしても解けない争闘、一生喧嘩をしても何うすることも出来ない争闘、その争闘が時とすると、何の苦もなくすぐ解け去つて了ふことがある。力と力が忽にして水平に歸し去つて了ふことがある。

『何故だらう？』

かう訊ねるものがある。

『解らない？』

『解らない。』と空が反響した。

泥沼の向うの家には矢張人が居ない。裸蠟燭がチラ／＼する。

## 十

懐妊して蒼い顔をした女が、腹の處をぢつと見て居た。

『そらまた動いた。』

メリンスの帯の縞の模様が動くのが見えるといふ。見える筈がないのだが確かに見えるといふ。其處

にも人間が居るんだ。虚誕をついたり、姦淫をしたり、罪惡を犯したり、人殺しをしたりする人間が居るんだ。憎み、ひがみ、嫉妬など、いふ分子が其處で刻むやうに呼吸をついて居るのだ。淺ましい！淺ましいが爲方がない。蛇のやうに生れぬ前から人間に憎まれて居る動物でさへその種は數千年來撲滅されずに繼續して來て居る。

犬殺しの持つてるやうな太い棒を提げて、片つ端から人間を撲滅して歩き度い。少くとも人間にも眼に見えるさうした大きな動物があつて、ドシ／＼迫害を加へて呉れ、ば好いと思ふ。

駄目だ、駄目だ、駄目だ……

坐つて居たが、ふと見ると硝子戸を透して、梧桐の葉がガサ／＼動いた。其處には庇が少し出て居て、下に小さな窓があつた。夜は其處から灯が葉を漉してチラ／＼見えた。

庇の上に一疋の黒猫が居た。

眼をギョロ／＼光らせながら、頻りに四邊に氣を配つて居るらしかつた。しかし遠く離れて居るので、此處にかうして人が見て居るとは流石にかれも氣が附かなかつた。

僕はジツとそれを見てゐた。

猫の暗い心理――生存の爲めに、これから臺所に人の居らぬのを耳で聞き眼で見鼻で嗅いで、こつそりその小窓から入らうとするさま、それよりもさうした暗い状態をそのものに知られずにかうして見て



居るといふことが僕の心を暗くした。

暗い力が自分と猫と同じやうに流れてゐるのを發見した。

互ひに弱點を握るといふことがよく人の口に上る。

互ひに弱點を握る！ つまり悲惨なる共食状態だ。猫だから、何でもないが、もしこれが同じ人間で、かうした他人の暗い心理を攫んだのなら、つかまへられた奴も災難だが、攫んだ奴も災難だ。弱點を握つた以上、それを利用せずには居られぬのが人間である。

夫婦がそれである。兄弟がそれである。親子がそれである。友人がそれである。師弟がそれである。戀人同士が殊にそれである。敢て敵に握られるのを恐るゝ勿れ、敵よりも味方に握られるのが一層恐ろしい。

猫はまだぢつとして居る。

小窓の中では、膳や皿をガチャガチャさせて居る音が聞える。下婢の晴れやかに笑ふ聲も聞える。

僕はそつと立つて行つた。

餘程近くへ行つても、まだ危難の其身に迫りつゝあるのを知らない。依然として耳を立て、物音を聞きすましてゐる。

大きな石を拾つて投げた。

旨く腹に中つた。

猫は慌て、飛び下りたが忽ち縁の下に逃げて了つた。

翌日見ると、矢張その黒猫は其處に居た。

危難よりも飢餓が恐ろしいのだ。矢張かれ等も係蹄わなの中に陥れられながら、それを係蹄と知らずに居る。

食ふことゝ、寝ることゝ、罪悪を行ふことゝ……。それより他に何も無い。我々も猫と同じやうに矢張庇に立つて、こつそり何か覗つて居るのだ。

十一

女の兒が枕を結付けに負つて、ねんくゝようを遣つて居る。

『ねんくゝよう！』

何も知らずに遣つて居る。

それがまた決して女の兒でなければさういふ眞似は遣らない。遺傳の力、本能の力、それがそんな無邪氣なものにも容赦なく働いてゐるのだ。

また、かういふことがある。母の腹に餘り近くにあとが出来ると、幼兒は無意識に股ぐらかがみとい



ふことを遣つて、『ねんね、ねんね、』と片言交りを言ふ。

自己の占領して居る母親を他が占領し始めたのが本能的に分るのだ。

つまり幼児が廻らぬ舌で第一に表白する嫉妬の聲だ。

で、五月位になると、母親の乳が細くなる。腹の中の兒と外の兒との競争がいよいよ始まる。すると外の兒は今迄とは變つたやうに氣難かしくなつて、癩癩は起す、腹は立てる、泣く、喚く。だましたつて言ふことを聞くものではない。

生存の争ひ！淺ましい食の争はもう其頃から始まつて居る。

そしてこれが戀の争闘、愛の争闘、蠶食の争闘、死の争闘となる。」

けれども女の兒は矢張平氣で枕を脊に絡りつけて、

『ねんねんよう、ねんねんよう。』

と唄つてゐる。

其聲は時代から時代へと續く。撲滅したくつても撲滅されない。兎に角自分で遣つて見なければ承知が出来ないといふ風で、ドシ／＼新しい發展を遂げて行く。

何と言つて聞かしたつて駄目だ。つまらない一生だの、悲惨な生涯だの、残酷な世の中だのと言つて聞かせたつて何だつて駄目だ。

『兎に角、私はまださういふ經驗をしたことがない。』

かう言つて誰も彼も新規蒔直しをやる。

五十年……百年……千年……萬々年……萬々億々年……

考へれば考へるほど、頭が眩惑する。何處に行つても其力にぶつかる。パン、パン、パンの叫び聲が耳を劈く。白い腕が其處にも此處にも見える。

自由！

自由とは何だ。自由とは何だ。そんなものが此の世の中にあるか。あり得るか。皆なその力の爲めに十重にも二十重にも縛られて、勝手に身動きが出来なくなつて居るではないか。右も左も前も後も、皆なその暗い壁だ、本能の暗い壁だ。



## 庖丁

庖丁の柄ばかり縁側に落ちて居たのを母親は手に取つて、

『庖丁を何うしたい。また、お前、何處かに遣つたんぢやないかえ？』

『知らない、知らない。』

と八歳ばかりの男の兒は頭を振つた。

『知らないぢやないよ、本當に、此子は爲方がありやしない。また何處かに遣つたんだねえ、此子は？』

『知らない、知らない。』

『だつて、此處に柄が落ちてゐるぢやないか、お前より他に庖丁などを持出して惡戯するものはありやしない。眞ちやんだつて政だつて……』

『知らない、知らない。』

と男の兒は矢張頭を振つた。

『後生だから出してお呉れよ。この兒は本當に強情で仕方がありやしない。誰に似てこんな性か悪いんだらう。亡つた父さんだつて、兄さんだつて、お前のやうな性の悪いものは家には一人もないのに……。よう、後生だから、お出しよ。隠してなど置かないで、出してお呉れよ。小言など母さんは言ひはしないからさ……。母さん、芋の皮をむかなくちやならないんだから。』

と苦々しさうに、腹立しさうに言つて、鼻涙を垂して低頭して居る男の兒を小突き廻した。

『よう、お出しつたら、』と言つた母親の聲は尖つて顔は赤かつた。男の兒は猶黙つて居るので、母親はいきなり懷の中に手を入れてさがし廻した。ふところの中からは草と折紙と一錢銅貨が出た。

『ありやしない！ ありやしない！ 母さんの馬鹿！』

男の兒はたうとう泣出した。口を半分あけて、眼と鼻と額とを一つに寄せて、わアわア聲を立てた。終ひには、

『母さんの馬鹿！』

と泣きながら手を舉げて打ちにかゝつた。

『呆れた兒だ。お前は母さんを打つ氣か、好い氣になりやがつて……。』と、母親はむら／＼と癩癩を立てたが、思ひ返して、『本當に、好い兒だから、出してお呉れよ。お菜を拵へるに要るんだから……』



……』

『知らない、知らない。母さんの馬鹿！』  
其處に老人が来て、

『お前はまた何故子供を泣かしてゐるんだえ……日暮れる時分には、さうでなくつてさへ忙しいのに、子供を泣かして、一緒になつて、ケンケン言つて居たつて爲方がない……。』

『でもこの子は庖丁を隠して出さないもんだから。』

『庖丁をかくした？』かう言つて男の兒の傍へ寄つて、『本當に定や知つてゐるんなら、出さなくつちやいけないよ。母さんがお菜を拵へるので要るんだつて言ふからな、好い兒だから。』

『知らない、知らない。』

と男の兒は泣きながら頭を振つた。

『知らないつて言ふものを折檻したつて爲方がない、其處等に落ちてゐるんぢやないか。よく捜して見る方が好い。』

老人は腰を曲げて、四邊を胸した。庖丁の身は何處にもなかつた。

母親はぶつぶつ言ひながら、庖丁の柄を持つて、勝手元へ行つた。小さい竈には汁の鍋が懸つて、火が燃えて居た。俎板の上には、里芋の入つた味噌漉が置かれてあつた。

母親はむき憎い思ひをして、小刀で里芋の皮を剥いた。

少時すると、其男の兒の姿が、裏の畑に見えた。

もう日が暮れ懸つて居た。畑には蠶豆が熟して居た。唐蜀黍の二尺ほどになつたのがガサガサと夕風に靡いた。

落ちた栗の花が地上に白く見えた。

男の兒は唐蜀黍を分けて、蠶豆の畑の中に入つた。四邊を胸はしてから、體を低くして、蠶豆の畝の柔くなつて居る土を掘つた。何をするのか解らなかつた。

やがて男の兒は其處から出て來た。裏に廻ると小屋があつた。その中には、澤庵を漬けた桶や薪や炭俵がごたごたと入れられてあつた。味噌桶の臭氣が強く鼻を衝いた。男の兒は其の小屋の入口の壁にひつたりと顔を寄せて、一人で悲しさうに歎歎げた。涙が留度もなく出る。よごれた筒袖で、拭いても拭いても出る。終には涙にぬれた手で、壁に字を書き出した。

庖丁の身は何處へ行つたか解らなかつた。新しい庖丁が町から買はれた。けれど母親は其の使ひ馴れた庖丁の無くなつたのを悔んだ。其庖丁は亡つた夫が若い頃大阪に在番に行つた時に、堺から土産に買



つて来たもので、いろいろの記念があるばかりではなく、切れ味がすぐれてよかつた。柄が悪くなる  
と、幾度となくつけ更へて使つて居た。少くとももう二十年近くになる。齒の中央が灣形を爲して居る  
のを見ても、主婦には離れ難ない馴染のほどが想像される。母親は新しい庖丁を手にする度に、其の古  
い庖丁を思つた。

『何處へ行つたんだらう、不思議なことがあるものだ。定が持つてるんなら、何時か出て來さうなも  
んだが——出て來ないのを見ると矢張定が何うかしたんぢやないのか知らん。不思議なことだ。』  
かう幾度も思つた。

けれどその心も薄らいだ。新しい庖丁に馴染ると共に、古い庖丁のことは段々忘れるやうになつた。  
初秋の晴れた日のことであつた。

蠶豆の畝の間に作つた小豆も熟して、二三日前に收穫れて了つた。跡には漬菜をまかうと思つて、母  
親はせつせと畑を耕して居た。もう大分耕されて三畝ばかりの畠には、新しい土の臭ひが充ち渡つた。  
母親は襟に懸けた手拭を取つては、鋤の手を留めて、をりをり額の汗を拭いた。

傍には栗の樹が涼しい蔭をつくつて居た。新しい荒蕙に陶器の小さい火鉢、其處には螢のやうな火種  
が生けてあつて、母親の煙草盆と煙管とが置かれてあるが、男の兒は其傍で跣足で遊んで居た。草や花  
を取つて來て、蕙の隅に並べては、一人で餘念なく獨言を言つて居た。

せつせと耕して居る母親の鋤の刃に、ふとガチリと音がしたものがあつた。例の石と思つて、取除け  
やうとして、手を其處に遣つて見ると、思ひもかけぬ其の古い庖丁の身が出て來た。錆びて、汚れて、  
赤くなつて……………。

『まアこんな處に。』

と母親は思はず聲を立てた。

『定や、庖丁がこんな處に。』

男の兒を呼んで見せた。

男の兒は黙つて顔を赧くして低頭して了つた。其秘密をすつかり讀まれたやうな氣がした。

『誰がまアこんな處に放つて置いたんだらう？　こんなに錆びちやつて……………。』と母親は庖丁の身の泥  
を落して、『本當に誰だか知らないけれど、使ひ忘れて、こんな處に放り出して置いたんだね。』

母親は不思議には思つたが、しかしこれが八歳の男の兒の爲たこと、は思はなかつた。まして物置の  
壁に顔を押しつけて泣いたなど、は夢にも知らない。

古馴染の庖丁は新しい柄をつけて再び主婦の手に使はれた。男の兒は其の掘出された時の心地を大き  
くなるまで忘れなかつた。



## 死

馬車がまたとまる。蒼い顔をしてよろ／＼とまた高粱畑の中に入つて行く。後の馬車の人々は皆心配した。

『何うしたんだ？』

『さつきの處からまだ一町も来やしないぢやないか。』かう言つて一人は首を外に出した。

肥つた一人は、先程から心配さうに黙つてぢつとして居たが、ふいと立上つて馬車を下りた。カーキ色の夏服は夕暮近い空氣にはつきりと見えた。

長い鞭を持つた支那の御者は、二人寄り添つて、何かこそ／＼話してゐる。

高粱の畑の中に入つた男は、やがてそこから其姿を見せた。いかにも疲れ切つたといふ風で、踞るやうにして辛うじて馬車の中に入つて行つた。肥つた男は、其後を追つて半分馬車の中に顔を入れて、暫く何か言つて居たが、やがて、

『開路、開路！』

と叫んだ。御者は慌て、鞭を鳴らした。

馬車はまたごと／＼動いて行つた。

肥つた男が後の馬車に乗ると、待設けた同じ質問が車中の三人から口を衝いて出た。

『何うした？』

『何うも様子が悪い！』と少し途切れて、『それに嘔吐す！』

『嘔吐す！』

と訝のやうに應じたが、しかも沈黙がそれに續いた。

恐るべきコレラ！ 恐るべきコレラの流行地から遣つて来たといふことが誰の心にもあつた。遼河の赤く濁つた水、それに血のやうな色をした夕日が射して、汚い支那街には汗臭い不潔な臭ひが充満して居た。九十度以上の酷烈な暑さに、悪るいと知りながら河沿ひの公園を賣り歩く氷の塊をも噛めば、町の角に出て居る安アイスクリームをも食つた。長い間、軍隊の飯や罐詰に飽きた身には、何んなものでも食欲を誘はぬ譯には行かなかつた。一二日の許可を軍司令部から得て大石橋から遣つて来たかれ等につては、營口の市街は丸でバラダイスのやうにすら思はれた。

公園の楊の涼しい蔭を、派手な涼傘をさした若い美しい西洋婦人がぞろ／＼と通る。それを、——其

死



同じ婦人を其夜、細い小路の、四角の小さい室のある、白いカーテンで四面を圍んだ一室に見た時は、誰も驚かぬものはなかつた。其處にはドイツ生れのマリーといふ女も居た。

日本軍の守備隊本部が居留地の公園近くにあつた。其入口には日章旗が交叉されて、番兵が立つて居た。一行は其處で軍司令部が戦闘の爲めに昨日前進したといふ報を聞いた。柝木城攻撃が第十師團方面に始まつたので、軍の前衛は海城攻撃に向つたといふ専ら評判である。『今朝から砲聲は聞えてるぢやないか。』かう言つて、守備隊の小隊長は遠方に其音を聞き得るやうな様子をして見せた。一行は慌て、出發の準備をした。行かぬといふ馬車を二臺無理に引張つて來て、色々買物をした荷物を載せた。寫眞の種板もあつた。蠅取紙もあつた。ビールもあつた。

居留地を發つて來たのは午後二時頃であつた。九十度以上の暑い日影がキラ／＼と人の眼を眩惑させた。前の馬車に乗つた一人は今朝から熱があると言つて居た。

『困つたもんだ。』

暫くして一人が沈黙を破つた。

『本當だ、營口なら、醫師もあつたが、此處ぢや何うすることも出來ん。』

『本當に困つたなア。』

又他の一人も言つた。

また沈黙した。

馬車ごとく行く。

『それに、司令部は何處に行つてるか解らんのが困る。昨日發つたといふからは、もう餘程先に行つてるに違ひない。』

『一二里の處に居れば好いけれど、それはとても望めないことだからナア。』

軍司令部に離れるといふことは——知つてる顔に離れるといふことは、滿洲の廣い野に放たれたといふこと、同じであつた。不安が募つて來た。

『許可された日限通りに、昨日歸れやよかつたんだ。餘り快樂を追つたから悪いんだ！ 昨夜など、あんな處に行つて、くだらぬ金を使つて……、昨夜の滞在に反對した瘡削やせぎすの男が愚痴をこぼした。』

『本當だ！』

と他の一人も言つた。

『そんな愚痴をこぼしたつて仕方がない。それよりも、現在に對する適當な處分をしなくつちやならんさ！』

肥つた男はかう言つた。實際さうなので、誰も皆口を噤んだ。

死



『それにしても、實際コレラなんだらうか。』

『何うも……たしかには解らんが、十中八九はさうらしい、皮膚の色なども變つて居たし、熱が烈しいし、吃逆しゃくごの出るのは悪性ださうだ。』

『さうだとなると……ぐづくして居られん。一刻も早く日本軍の居る處へ行つて、兵站部でもさがして、醫者に見せなければならん。先生だつて、此處で死んで可哀相だ。』

『兎に角大石橋までは大急ぎで行かなくつちやならん。』

で、馬車を成るだけ早く促して進めることに一決して、片言なりに支那語の語せる一行中の一人が身振をしたり手真似をしたりして御者に談判した。けれど急には要領を得なかつた。營口を出る時、大石橋までゆくと言ふと、とても跟いて來さうにもないので、出鱈目に近い處の村落の名を言つて、無理やりに約束をきめて來た。それに、道路が非常に悪く、泥濘ぬかるみのまゝ石のやうに固くなつて居る。とても内地で想像するやうな譯には行かない。

『駄目だよ、奴さん、飯を持つて來ない、それに、馬にやるものを準備して來ないとぬかしやがる。』かう其男が一行に報告した。

『駄目だつて、爲方がない。無理やりに、引つぱたいでも伴れて行くさ！ 奴等は腕力でなくつちや駄目だ。』

通辯の男は間に挟つて困つたが、段々其譯を話して、——病人が居るんだから何うすることも出來ん、次の村に日本軍が居れば好いが、居なかつたら大石橋まで行つて呉れといふことを懇々と話した。賃錢も増してやらう、飯も分けてやらう、馬の糧食を買ふ錢もやらうと言つた。御者はそれでも素直には應じなかつた。

一行は軍の出征當時から、司令部について戦地に遣つて來た。大本營の寫眞班の屬員もあれば、某雜誌の從軍記者もあつた。戦地の事業を視察に來た御用商人の手代は粗食に寢れて蒼い顔をして居るし、戦争の實見講談をやらうと思つてついで來た講釋師は、汚い洋服の胸をはだけて肩からズツクの雜囊をかけて、憊れ切つたといふ顔をして居た。コレラに罹つた男は、芝で可也聞えた寫眞師で、活動寫眞の興行師から莫大な金を取つて、大きな寫眞機械を携へて來た。

これ等の人は上陸してから三月の間、具さに艱難を嘗め盡くした。車の輪の半分以上も埋まる路の後押をしたこともあれば、道明寺糲ほしをかじつて二日夜野山に寝たこともある。鮭罐、福神漬罐、砂のヂヤリ／＼する粟のかて飯。それよりも一番辛かつたのは、夏の暑い日の急行軍、司令部に離れた時の不安、雨に降られた夜の露營。それに、かれ等は何ぞと言つてはよく喧嘩をした。戦争の空氣が齎あらした一種の氣風、女氣を抜きにした殺伐の世界は總ての人の心をして獸に近からしめた。かれ等は時には食を争ふことさへあつた。



『一人で患者を放つて置いては酷い!』

誰も皆かう思つた。しかし自ら進んで、危険な病氣を看護する任に當らうとするものもなかつた。其中で、比較的関係の深い従軍記者は、『自分も何だか腹の具合が悪い、それに熱もある。』と言つて居た。

『あゝあゝ、もう戦争はよく／＼厭だ。』

と講釋師は言つた。戦争の初期に、かれは司令部から黙つて野戦隊へ出て行つた軍規違反で、久しく憲兵隊に拘留されて、人一倍辛い思ひをした。その苦痛が何となく其言葉に顯はれて居た。

『今度、司令部に着いたら、是非歸して貰ひませうや。もう金にも慾にも易へられない。命あつての物種だ!』

御用商人の手代はかう言つて相槌を打つた。

『本當ですともな、命には代へられませんやな。軍人なら、そりや命が商賣、戦死は國家の爲めで、此上もない名譽ですけれども、我々が死んだつて、泣くのは噓位なもんで、犬死ですア。死んぢや詰らねえ。』

『本當にさうですとも。』

『歸りませう歸りませう。司令部にいたら、早速參謀にお願いして、歸して貰ふことにしませう。』

『けれど對馬沖は、敵艦が出没してゐて危ないさうだ!』

と傍から寫眞班の屬員が言つた。

『だから、運送船で歸らずに、營口に出て、外國船で歸れば、危険なことは少しもない。旅順の傍でも、手を振つて通つて行かれますア。』と手代は得意さうに言つて、『だから、私はちやんと、營口で其手筈を定めて來ました。山海關に出て、汽車で天津に行つて、そこから外國船で歸るやうに定めて來ました。』

『もう歸る、歸る。いやだ、いやだ。よく／＼厭だ。』

と講釋師はさも厭さうに言つた。

自由に歸國することの出來ない寫眞班の屬員と従軍記者とは長大息を吐いた。

空が俄かに曇つて來たのを誰も知らずに居た。砲聲が頻りに聞えるので、それとなく外を見ると、廣い廣い滿洲の野には一面に恐ろしい黒い雲が蔽ひ懸つて、沈まうとした夕日は黄い物凄光を四邊に漲らした。兩側の高梁はザワ／＼と風に鳴つて、天地が今にも恐ろしい凄じい怪物に襲はれるかと疑はれた。遠い村落の楊樹は既に其黒雲に蔽ひつゝ、まれて見える。

砲聲がドロ／＼ドロ／＼と聞える。

『ひどい天氣になつたねえ!』

死



と屬員は言つた。

『夕立が来る。』

と心細さうに従軍記者も言つた。

果然夕立が来た。恐るべき滿洲の夕立！ 雷が鳴り出したと思ふと、それが天から地から一面に轟き渡つて、槍のやうな雨が車軸を流すばかりに降頻つた。

殊に恐ろしいのは、電光で、黒い凄雲の堆積を破つて、片時も止む時なく、無數の大きな光を空に投げると、それに續いて、碓かたすを引くやうな雷の轟音とどろき。

それに、滿洲の道路の習ひ、石のやうに固かつた土は、時の間に壁土のやうに滑かになつて、車軸は忽ち泥の海に埋められるといふ光景になつた。

降る、降る、實によく降る。鳴る、鳴る、實によく鳴る。今まで聞えて居た砲聲ももう何處かへ行つて了つて、天地は唯ザアと降る音、轟と鳴る音。

その物凄く暗くなりかけた空を——憩ふべき樹蔭も人家も見えずに唯無限に高粱畑の續く中の道路を二輛の支那馬車は、泥に塗れながら覺束なくたどつて行つた。

雨の小降になつた時は、もう全く夜になつて居た。

死のやうな暗い夜だ。

御者は燈火の準備をして居なかつた。馬車は路の岐れる處に來ては迷つたり、俄に出來た深い泥川に邂逅しては危く倒れさうになつたりした。馬の糧食を買ふやうな村落は行つても行つても到着せず、それに路を迷つたと見えて、來る時に日本軍が旗を軒に出して一小隊ばかり屯とどして居た大きな廟ぼのある村落をも過ぎなかつた。

御者は絶えず不平を言つたが、しかしかれ等にとつても、行く處まで行くより他に爲方がなかつた。

後の車にはそれでも微かな火の光が見えた。それは御用商人の手代が携へて居た懐中電燈の光であつた。その光は一種の青みを帯びて、微かに暗い車中を照した。寫真班屬員の頬鬚の深い顔、従軍記者のしよんぼりとした瘦せた顔、講釋師の丸い顔などが、丸て他界から來たもの、やうに厭に蒼く物凄く見えた。

今少し前、車が泥川に陥つた時、従軍記者は流石に心配になると見えて、車から下りて、前の馬車の留つて居る處へ行つて横木の處から中を覗いて、

『何うだね、おい？』

と聲をかけた。

其返事の代りに厭な苦しさうな唸聲が聞えた。身の毛もよだつやうな凄じい唸聲であつた。

死



『何うだ、よくないか？』

今一度聲をかけて見た。矢張、唸聲が其返事であつた。闇なので、車の中はよく解らなかつたが、病人は打伏になつて臥てるるやうであつた。

御者が二人して一生懸命に川に陥つた馬車を揚げようとしてゐる傍に、急いで戻つて来て、

『おい、一寸懐中電燈を借せ。』

それに跟いて、講釋師も手代も寫真班の屬員も行つて見た。從軍記者は懐中電燈を高くかゝげた。末ひろがりに線を成して廣がつた光の下には、果して打伏になつた洋服姿が靡げながら照らされて見えた。横にした顔が微白く、左の手はだらりと下げられてあつた。講釋師は其の顔の周圍から懸けて其處ら一面に嘔吐した不潔物の散らばつてゐるのを見て取つて、ゾツとしたといふ風で、急いで馬車から身を離れた。微かな唸聲が聞えた。

人々は顔を見合せた。

從軍記者は、

『太田君、何うした？』

病人は頭を少し擡げて、眼を開いて、此方を見た。其顔は死人のやうに蒼かつた。

『太田君、何うだえ？』

『うむ、うむ——』

『しつかりし給へ、もうぢきだから、大石橋に行きさへすりや、軍醫も居るから、……しつかりなくつちやいけないよ。』

『うむ——うむ——』

急に催して來たといふ風に、首を猫のやうに立て、頻りに嘔吐し始めた。

誰も彼も馬車を離れた。

『困つたねえ。』

『あれぢやとても駄目だ。』

『あゝして放つて置くのは、實に忍びんけれど、何うすることも出来んねえ。』

『爲方がないよ、あれぢや……』

と講釋師は言つた。

『一刻も早く行くことが專一だ！』

誰も皆言つた。

さて御者を促し立て、行かうとすると、今度は御者が苦情を言ひ出した。彼等も病人のコレラであるのに氣が附いたらしい。それを賺したり威嚇したりして進行を續けるのは容易ではなかつた。

死



暗い壁のやうな闇は續いた。馬の喘ぐ音と、御者の鞭を鳴らす音と、車の動く音とが四邊の沈黙を破つて聞かれた。車の中では誰も口を開くものはなかつた。

不意に、

『もう、何時だ。』と言ふ聲がした。

『どれ、一寸懐中電燈を見せ！』

暫くして、

『九時二十分。』

『もう七時間以上も懸つてるぢやないか、一體何うしたんだ。本當に大石橋に向つて進行してるのかし。』

と言ふ不安らしい聲がした。しかしそれに調子を合せるものもなかつた。跡はまた沈黙に返つた。誰も皆疲れ切つて了つた。

寫真班の屬員は一番先にその大きな體を車臺に凭せ懸けてこつくりこつくりやり始めた。手代は荷物に打伏に凭れかゝつて、やがて軽い躰を立て出した。講釋師は猶暫く懐中電燈の薄暗い光の中に眼を光らせて居たが、やがて其の丸い顔が前に踏みさうになるのを從軍記者は見た。

從軍記者はいろ／＼なことを思つた。寫真師が話好きの軽い調子で、其の身の上話をしたことがそれとなく思ひ出される。田舎から出て日本橋のある寫真屋の見習書生で居た頃、今の芝の寫真屋に年頃の意氣な娘があつた。その娘と色目を遣ひ合つたり、暗室の中で手を握り合つたりしたことを得意に笑つて話した。流暢な滑かな口の利きやうをしたが、その中に何處か訥るやうな、ひつつるやうな處のあるのを、其時分過つて藥用の硫酸を飲んだ爲めだと言つた。其時、手代が、

『それちや硫酸を飲まなかつたら、大變だつたらう。今でさへこんな立派な雄辯家なのに。』と言つて笑つたのを思ひ出した。酒の席では二上り新内を得意にして唄つた。大の見得坊で、しやれ者で、一行中での御大將と言つたやうな様子をするので有名であつた。それから財布の中に十圓金貨を三箇ばかり入れて置いて、管理部の下士や兵卒などの居る處に行つては、よくそれを出して見せた。蓋平では、驢馬を十八圓出して買つて、支那人の苦力くろいを別當らしく仕立て、行軍中には、いつもそれに騎のりつたが、ある日、振落されて向う脛をしたゝか打つた。其のさまが可笑かつたとて、一行ではそれを話の種にした。昨夜、營口の細い巷路のある家で、ある室から出て來たかれのこゝくした顔も眼の前に見えるやうに思はれる。それが、かうして滿洲の……と思ふと、從軍記者はゾツとせざるを得なかつた。同情の念も湧くやうに起つた。

雨は全く止んだ。空には星も見え出して來た。闇に續く闇、其の無限の闇の中に、前に行く馬車の黒



い影がゴト／＼動いて行くのが微かに見える。

従軍記者は猶暫くいろ／＼の想像に耽つて居たが、十分ほど経つた後には、かれの頭は馬車の柱に、手はだらりと膝の上に顔を少し斜にして、早くも熟睡の境に落ちて居た。

懐中電燈が徒に車中を照した。

其の微かな電燈の光に、ある光が加はり始めたのはそれから三十分ほど経つてからであつた。東の地平線が段々明るくなつて、村落の所在を示した楊樹やなぎが其中にこんもりと黒く見え始める。高粱畑の遠く連つたさまもそれと認められる。

遅く月が出た。

其月は血のやうな色をして居た。道の屈曲した具合によつて、泥濘が一面にドロ／＼と其黄い佗しい光を帯びて光る。その時には、車臺に居る御者の顔は亡者のやうに見え、馬車は屍を他界に運ぶ柩のやうに黒い影を長く後に布いた。時には、高粱の影に蔽はれて見え、時には濁つた川のキラ／＼する土手のやうな處を行つた。

野は矢張廣々として居たが、それでも處々に村落があつたり、人家があつたりした。雨は此附近に於いて、殊に烈しかつたと見えて、川は音を立て、流れ、路の泥濘は更に二層の深さを増した。

やがて月の光は馬車の中まで照らすやうになつた。前の馬車では車内ががらんとしてゐた。後の馬車で

は正面に向つて眠つて居る講釋師の顔がくつきりと照らされて居た。従軍記者はうつゝ心に、あゝ、月が出たな。』と思つたが、其まゝ又すぐ眠つて了つた。

それから馬車は村落の傍を通つたり、大きな楊樹の黒い影の下を通つたり、牧場のやうな處を通つたりした。行く先にびかツと大きく光るものがあつたが、それは大きな池に月の照つたのであつたのがやがて解つた。

人家が段々多くなつた。

一行が眼を覺ました時には、馬車は大きな石造の洋館の前に來て居た。前には宏壯な洋館が幾つとなく連つて居て、バルコンや棟や簷のきが月の光の中に黒い線を描いて聳えて居る。丁度西洋の繪葉書でも見るやうに思はれた。それに其處には大きな石の階段がまともに月に照らされて、其下には、驢馬や馬車や輜重車が一面に置かれてあるのが眼に入つた。

誰も皆夢のやうな氣がした。他界に來たやうに驚いた。

『此處は何處だ。』

誰も皆な眼を睜つた。

死の暗い境を通つて、驚くべき光明の彼岸に達したやうに誰も感じた。神仙譚にある一齣を實現したやうにすら従軍記者には思はれた。

死



月がいかにも明るかつた。大きな石段を落ちた影が總べてくつきりと鮮かに見えた。石段の上には支那苦力の躡踞つて寝て居るのが其處にも此處にも指さされる。此世では見られぬやうな一種の光景と氣分とが到る處に滿ち渡つて居た。

病人の容態を見に行つた屬員が、慌て、歸つて來て、

『もう死んでゐる。』

『え？』

一種の戰慄が人々の脈を震はせた。

『もう、冷たくなつて居た！』と屬員は深い感慨に充ちた聲で續いて言つた。

誰も口を開く者はなかつた。月に照された石段と宏壯な洋館とを前にして、神秘的深い沈黙が續いた。從軍記者と屬員とはやがて其石段を登つて行つた。丈の高い二つの洋服姿は白い冷たい花崗石の上に小さい影を黒くくつきりと印した。靴の音は一段毎に高く冴え渡つて響いた。登り詰めると、其處に大きな扉がある。開けようとしたが、鍵がかゝつて居た。

—花袋全集 第三卷 終—

## 讀後小感

加能作次郎

この卷に收められてゐる三つの長篇、『髮』『春雨』及び『殘る花』は、何れも花柳界に題材を求め、さういふ特殊な社會に藝者や待合の女中といふ特殊な生活を送つてゐる女の戀愛——といふよりもその愛慾情痴の生活を描いたもので、題材的に共通するものがある。そしてその發表されたのは、『髮』が明治四十四年（國民新聞）、『春雨』（讀賣新聞）及び『殘る花』（國民新聞）は共に大正三年で、『髮』から後の二篇までに三年の間を置いてゐるが、先づこの三篇は、長篇小説として同時期同年代に連續的に書かれたものと見なしてよい。

年譜によると、田山さんは、明治四十年に例の『蒲團』を書き、四十一年から四十三年、即ち『髮』の前の年までに、『生』『妻』『縁』の所謂三部作を、一年に一作づつ發表してゐる。この三篇は、大體に於て、何れも作者の家庭生活を主材とし、自傳的興味の濃厚な、謂はゞ作者自身の實生活の記録だと思ふべきものである。ところが、その三部作が『縁』を最後に一段落つけられると、今度は、題材的



にがらつと方面の異つた『髪』以下の三篇を、連続的に發表してゐるといふわけである。即ち、作品の基調をなす作者の人生觀は不變であるとしても、描かれてゐる世界が、今迄の、どちらかといへば暗い、陰氣な、じめ／＼した日常生活的なものから、花柳社會といふ全然色彩の異つた、外見的には明るい、艶めかしい愛慾の世界に移つてゐるのである。この事實は、當時の田山さんの生活を知る上に、かなり重要な、傳記的興味をもたらすもので、由來田山さんの作品は、晩年の『源義朝』や『通盛の妻』の如き歴史小説は別として、自分の實際経験や、日常親炙してゐる周圍の生活を描いたものが多いことを思ひ合はせると、その頃の田山さんの生活の有様も、大體想像されるであらう。そしてこの三篇は、前の『生』以下の三部作に對して、花柳界小説の三部作ともいふべく、作者もさういふ意圖の下に書いてらしく思はれる節がないでもない。然り而して、それから更に三年を経た大正六年に至つて『或る僧の奇蹟』や『残雪』の如き、作者の内面生活に於ける一大飛躍を思はせる諸傑作を出してゐるが、この内面的大轉換の契機が、即ちこの『髪』以下の三部作を生むに至つた時代の生活の中に育まれ、それによつて促されたものであることと思ふと、『蒲團』以來十年の間に、作家として又人として、田山さんの歩んで來た内外兩面の生活の様も髣髴されるやうな氣がして、一層興味深く覺えざるを得ない。

『髪』が國民新聞に發表され出したのは、私が早稻田の文科を出たばかりの頃のことであつた。その時分、私はまだ田山さんに個人的に面識はなかつたが、自然主義に心酔してゐて、『蒲團』以來、田山さんの熱心な愛讀者だつた。新聞や雑誌にあらはれる長篇も短篇も、大抵缺かさず之を読み、『生』や『妻』などは、新聞を毎日切り抜いてゐた位だつた。『髪』も勿論、態々國民新聞を取つて、毎朝待ち構へて讀んだものだつた。

そこには一人の藝者に戀して、その愛慾の絆の斷ち難きに悶え苦しんでゐる中年の男の、熾烈な戀愛の感情と深刻な悩みが主に描かれてゐた。女の肉體からだも心も、全部的に所有せんとして所有することが出來ず、而も思ひ切らうとして思ひ切ることが出來ず、即いたり離れたり、迷つたり疑つたり、激しく熱したり、嚴しく自己を反省したり、斷ち難い執着に一刻の息まることもなく悶え苦しんでゐる、さうした男の遺瀨ない悲痛な心と、それに溺みついて行く女の情、牽きつ牽かれつ互に愛し合つてゐながらも、而も相手の心を完全に掴み得ない焦燥の苦惱の中に、盡きもやらず破れもせず、解けつもつれつ綿々と續く愛慾生活の實相が、微細に切實に描かれてゐるのだつた。

私は勿論さうした戀愛の経験もなかつたけれど、主人公の性格や心持に共鳴するところ多く、すつかり作中の人物になつて、毎日彼と共に悩み、彼と共に悲しみつゝ、感銘深く讀み續けたものだつた。今度二十數年振りに再び之を反讀して見て、さすがに自分の年齢の相違や何かの爲に、以前ほどの深い感銘は得られなかつたといふものゝ、矢張り非常に面白く、最後まで巻を描くことが出來なかつた。



材料からいへば、この作は單に一人の藝者と客との、ありふれた色戀の關係を描いたものに過ぎない。そして作の形式からいつても、長篇小説らしい何等の結構もない、所謂波瀾や曲折はもとより、事件らしい事件もなければ筋らしい筋もない。又主人公と女主人公との外に、これといふ人物もなく、始めから終まで、いつも同じ二人の男女が、共に愛慾の絆の斷ち難きに悩んでゐるといふ、同じ心理同じ場面の連續乃至反覆に過ぎないやうなものである。それにも拘らず、この二百頁に餘る長篇が、少しも單調さや退屈さの感を與へないで、終ひまで一氣に讀み通させるばかりでなく、發表後二十數年を経た今日に至つても、そこに何等時代的の距りや古さなどを感じしめないのは、さすがに巨匠の作だと思はずに居られなかつた。

この作も自傳的要素が頗る多い。寧ろ主人公は作者自身で、その實經驗をその儘書いたのではないかと思はれる位である。ともあれ田山さんの作には、男女の愛慾を描いたものは頗る多いが、中でもこの『髮』の一篇の如きは、最も直接的にそれを取扱つた、且つ代表的なものではないかと思ふ。たかが相手が一藝者ではないかといふ勿れ、さうした女なればこそ、一層眞剣に戀もし、又その悩みも深いのだ。

『かうした女には、とてもまことの戀は求められない。』  
さうと知りつゝも、尙ほ且つ飽くまで眞實な戀を求めてやまない男の心こそ悲痛だといはねばならぬ。

『どうせ女には男の心持は解らない。』

かう男が絶望的に言ふ。すると女も、

『どうせ男には女の心持は解らない。』

と鸚鵡返しに言ふ。結局『女は女、男は男だ。男の心持が女に解りやう筈がないやうに、男にも女の心持は解らないのだ。』而もさういつた冷かな諦めの心に安住してゐられないところに、兩性戀愛の悲劇があるのではないか。所詮愛し合つてゐながらも、互に靈と肉とが離れぐゝに、永久に並行線の上を孤獨に歩いて行かねばならぬのが彼等の運命か、戀愛の宿命か。或は又戀愛の極致は死か、共同の死によつてのみ、互ひの眞の戀が遂げられるのか。……………

讀みながら、忽卒の間にそんなことを考へた。

それから『髮』の主人公も女主人公も共に名前がつけられてゐない。單に「男」と「女」となつてゐるきりであるが、一寸型破りで、そんなことも面白く思はれた。

『髮』から『春雨』に移ると、感じがまるで違ふ。『髮』は主觀的な感じの強い作であるが、『春雨』は純客觀的な小説である。『髮』は男女主人公の愛慾心理の説明描寫が主で、花柳界の女を取扱ひながら、その背後の花柳界そのものや、彼女の花柳界に於ける生活などは殆ど描かれてゐないが、之に反し、『春



『雨』では家庭の境遇の犠牲となつて、藝者になつた一人の女の數奇な半生の運命と共に、その社會の種々の内情や、藝者生活、圍はれ者生活の悲哀や痛苦や、歡樂や哀傷や、その他さまざまの事象を如實に描いてあつて、事件的興味も多く、人物もそれ／＼活躍して居り、變化にも富んでゐて、讀んで此方はるかに面白い。そしてこの作も、結局男女の愛慾の葛藤、兩性相牽き相反撥する人間生活の如實な描寫に、その中心の興味を置いてゐるといつてよいだらう。何となく『髮』を裏返しにしてその前半を見せたやうな感じがあり、まさか『髮』の女主人公の前半生を描いたものでもあるまいが、併しさう思へば思へなくもないやうな所もある。

○ 『残る花』は『春雨』と同趣同巧の作である。或る待合の一女中の愛慾生活を中心に、花柳の巷の裏面や暗面を描いたもので、『春雨』とは別の角度から、花柳界の生活を觀たところに別種の興味がある。

こゝでもまた、『春雨』と同じく男の心といふものが問題にされてゐる。

『男の心といふことがお糸にはわかりかねた。頼りになるやうな頼りにならぬやうな心持がしてゐた。頼りにして好いのか、頼りにしても爲方がないのか。それもちよつとお糸にはわからなかつた……』

『春雨』の中にも、これと同じことが、主人公の王子の口から、何度言はれたか知れない。そしてこ

れを裏返せば、『髮』の主人公の女に對する言葉になるのである。

○ 短篇『良』は、一種の感想小説である。自然主義的な、あまりに自然主義的な思想や人生觀の、露骨な表白である。年代はよくわからないが、恐らく初期の作品であらう。(昭和十二年六月)



昭和十二年六月十二日 印刷  
昭和十二年六月十七日 發行

花袋全集第三卷  
預約價金壹圓八拾錢



製複許不

著作者

田山 錄 彌

發行者

川 俣 馨 一

印刷者

矢 島 勇 三 郎

東京市小石川區竹早町三十二番地

(内外書籍株式會社內)

發行所

花袋全集刊行會

電話小石川(86)一〇五四番  
振替東京二八七九〇番

(刷印所刷印島矢)











